

§5 テント・タープの設営

●セッションの目標 (参加者はこのセッション終了時に次のことが達成できる。)

1. 代表的なテントの種類、特徴、用途を知る。【野営章 (4)】 (3-1- ③)
2. 家型テント、ドームテント、タープについて構造と各部の名称・機能を知る。 (4-2- ①)
3. 天候 (晴天・雨天) ・季節 (夏季、無積雪、積雪) ・宿泊日数に応じた、設営の順序 (優先順) を知る。 (4-1- ①)
4. テント・タープについて、正しい取り扱い方、標準的な張り方を知り、実践する。 (3-2- ⑤、4-2- ②)
5. ペグの打ち方と張り綱の扱いを知り、実践する。 (4-2- ④)
6. 雨天、強風、夜間における張り綱、支柱、ソドクロス、換気窓・扉の扱いを知り、その処理を実践する。【野営章 (5)】 (4-2- ③)
7. テント本体の乾燥と、グランドシート下の地面の乾燥の方法を伝える。

●指導上のねらい・ポイント

1. 隊指導者として、スカウトの安心と安全を確保するための「テント」を購入するにあたって判断の指標となる、スカウトキャンプのテントに求める性能等について、それぞれの隊の状況を鑑み、必要な情報を与える。
2. まず、テントの構造とどうやってそれが建っているのか、そして各部の名称とその機能について知らせます。
3. 標準的な「晴天」「無雪期 (春～秋)」での設営を基本として理解させる。
4. 設営順は、「タープ」が一番先。これはどうしてなのか、その理由をきちんと伝える。
5. ペグと綱について知り正しく使う。
6. 雨天、夜間の張り綱、テント布地の通気性、換気 (換気窓)、雨水の浸入を防ぐソドクロスの正しい設置、また、それぞれの乾燥方法を知る。

●セッション展開にあたっての留意点

- ・「まずはやってみよう」。

●準備品 ・名称〈規格〉(数量)

- ・班用 (指導者) テント (班の数) ・ドームテント (班の数) ・タープ (班の数) ・工具 (班の数)
- ・ハンドアウト (人数分)

●他のスタッフへの依頼事項

【他の講師に】

・

【業務・奉仕スタッフに】

・

●セッション構成と展開 (時間配分)

- 講義 (30 分) → 実習 (55 分) → まとめ (分)

《導入》(5 分)

1. 「 」

《展開》(80 分)

1. 代表的なテントの種類、特徴、用途を知る。【野営章 (4)】 (3-1- ③)

①住居となるテントについて

→ (参考資料 (「OGEE 隊の野営大全 01「テント」」)

○キャンプを行うスカウトの・・・

- ・年齢構成 (カブ、ボーイ、ベンチャー → 丈夫さ、張りやすさ)
- ・活動単位 (個人、班・組 → 広さ、出入口の使い勝手、換気窓の大きさ)
- ・期間 (居住快適性 → 防水、耐風性、テントの高さなど)
- ・経験度 (構造や機能、防災加工の有無)
- ・交通手段 (重量、ケースの可搬性、コンパクト)

- ・移動か固定か（重量・かさ、前室の有無と形状、収納形態（パーツ毎に収納袋があるのか））
- ・季節・天候（耐熱（暑）、耐雪、耐風、強度、防水性、通気性、防湿性、構造、素材）
- ・地理的要素（防水性、耐衝撃性、耐久性、防寒性、通気性）
- ・保管状況（構成素材の劣化、コーティング等の経年変化、防カビ性）

等により、使用する（選択する）テントが異なる。そのことを知り、対象とするスカウト活動に最も適したテント（できるだけたくさんのシーンで使えることも含め）を選べるだけの知識を備える。

○ドームテントを選ぶに当たっては、次の点を考慮する。（別添資料を参照）

- ・構造・・・ 構造が簡単で、丈夫で、軽くて、張りやすいものか。
- ・価格・・・ 各班・組に同じテントを用意できる、予算内で買えるもの。
- ・防水性・・・ ボトム（グランドシート）はバスタブ構造で、縫い目にはシームテープ等による防水処理してあるもの。
- ・換気性・・・ 出入口以外に、1～2ヶ所の換気窓があること。
- ・フライシートと前室・・・フルフライタイプで出入口には前室が付いていること。

○また、テントを購入する際に大切なポイントは、破損した場合に修理が可能かどうかということ。

最近は比較的高性能で安価なものがホームセンター等で販売されていて、スカウトのキャンプシーンでも十分に使用できるものがある。それをメーカーが修理してくれればいいのだが、安いものの多くは、中国やベトナム等で生産したものを輸入していて、修理は対応していない→使い捨て。多少は高くても、修理やパーツの供給が保証されている国産の定評あるメーカーのもの、外国でも名の通ったブランドのものを購入したい。

○また、安価な1～2人用ドームテントに多いのだが、フライシートの形状（要は「前室」）が適切でなく、雨天時にテント本体の扉を開けると雨水が入ってくるものが、意外と多い。また、ドームテントで、フライシートが本体の一部しか覆えないもの、テント本体の縫い目に防水処理（シームテープ）が施されていないものなどにも注意が必要である。

2. 家型テント、ドームテント、タープについて構造と各部の名称・機能を知る。

①まず、テントです。

○テントの構造（ジャンテンとドーム）とどうやってそれが建っているのかを考えさせる。

○次に各部の名称とその機能について、それがどのような役割を担っているのか、その役割を果たすために必要なスペックを、他との関連を含めて理解させる。

「班用」「指導者用」テントは、収容人数以外に選択の余地がないので、ここではドームテントの選ぶにあたって必要となるスペックについて考える。

（ア）収容人数

- ・テントは、基本的に「○人用」と表示されている（JIS規格*；このJIS規格は1999年に廃止された）。その表示に従えば、確かにその人数が寝られると考えられる。しかし、この収容人数はフロア面積に対して何人寝ることができるかのみを表しているのであって、荷物などのスペースは入っていない。
- ・ボーイ隊のキャンプのように個人装備をテントに入れる場合は、入れ方や整理の仕方にもよるが、表示人数分の人を収容するのは難しい。「実質人数＝表示人数－1（or 2）人」と言っているのはこの名残。
- ・多くのメーカーは、そのメーカー独自の人数表示をしている。その表示人数には個人装備のスペースも含まれているようだが、統一の規格ではないので、必ずショップ等で現物を確認（実際に荷物を置いて寝てみる）してからご購入すること。

（イ）形状

- ・一口にドームテントと言っても、たくさんの形がある。ここで考えたいのは、側面、すなわちウォールの立ち上がりだ。1～3人用は別として、例えば班用やカブの組用のようにある程度の人数（4人以上）を収容するのであれば、ウォールが天井に近い部分まで垂直に近く立ち上がっているものが居住性が高いのでいいと思われる。（反面、風の圧力をモロに受けることになるので、次項（ウ）を考慮しなくてはならない。）
- ・ベンチャーの移動ソロキャンプ用のテントでは、特にウォールの形状にこだわらなくても良いと思われる。ほとんどが1～3人用のテントと思われるため。

(ウ) 構造とポール（支柱）

- ・ドームテントには、スリーブ（ポールを通すところが布の筒になっている）タイプとフックでポールにつり下げるタイプがある。
- ・ポールについては、一般的にポールの数が多いほど強度と居住性がアップしている。ちょっと変わったところでは、ポールが A の字になったモノもあり、このタイプは設営が簡単で強度もある。
- ・大型ドームテントで、ポールが 2 本をクロスして本体を立ち上げているタイプがあるが、このタイプは「風」に弱い（→強度不足）ので、注意を要する。

(エ) 雨に対する対応

日本は雨の多い地域であるため、防水性に優れたテントであることが求められる。しかし、防水性を優先するあまり、換気性能（と通気性）を疎かにしてはいけない。

- ・耐水圧・・・日本の風雨に耐えるには、1500mm の耐水圧が必要。
- ・ボトム・・・ボトム（床、グランドシート）の耐水圧は 2000mm ほど。形状バスタブ型であること。入口が地面と同じ高さのものはダメ。
- ・防水処理・・・ボトムの縫い目にシーリング加工がされているか。通常はシームテープというテープが貼り付けてある。
- ・前室・・・フライシートで作られる「前室」の広さは十分か。雨天時に濡れないで靴の脱ぎ履きをする際に必要。雨の少ない国で作られた海外ブランドのものの中には、これが十分でないモノがある。

(オ) それ以外の性能

- ・通常のスカウトキャンプでの使用であれば、3 シーズンのものを。他に全面メッシュの夏用のモノ、防寒・高耐性の冬用のものもあるが、必要があればそれも検討する。ちなみに、3 シーズンのドームテント（モンベル・ムーンライト 5 と 7）で、裏磐梯で雪中キャンプ（1 晩で 30cm 以上の積雪あり）で行ったが全く問題はなかった。

* 収容人数の JIS 規格について（1987.8 制定）

- ・ドームタイプの場合は、ボトムから 26cm の高さのところで、大人 1 人あたり「55cm × 180cm」の広さとなっている。ちなみに 3 人用であれば、135cm × 180cm となる。
- ・ちなみにジャンテンは A テンに換算すると 8 人用と同等となるが、寝るこんな感じで指導者 6 人では窮屈。

※この JIS 規格は 1999 年に廃止された。



3. 天候（晴天・雨天）・季節（夏季、無積雪、積雪）・宿泊日数に応じた、設営の順序（優先順）を知る。

①まず、標準的な「晴天」「無雪期」での設営を基本として理解させる。

○ポイントは・・・

- (ア) 設営の順序は、「食う・寝る・排す」ではなく「寝る・排す・食う」の順序が基本である。
- (イ) まずこの順序で基本的な設営を行い、快適さと衛生については設営後の「日々の改善」によって随時獲得していく。
- (ウ) 夏季は、直射日光による被害（人体・食料）を避けるために日射を遮ぎるものが最初になる。
- (エ) §4 をふり返り、サイトレイアウトを参照しながら、キャンプ場の土質、傾斜、風向きに注意して設営を行なう。
- (オ) 雨天時は、ぬかるみや泥を直接テントに付けないように、床の部分をそれ以上濡らさないように設営する。（最近の指導者テントのグランドシートは完全放水なのでまあ安心。）
- (カ) 雨天時は多少張る順序が違うので、そこも確認させる。
 - ・晴天時で地面が乾燥しているのであれば、特に設営の順序は問わない。きちんと張ればいい。
 - ・雨天時には、居住＆寝室部分を濡らさないことを第一に考える。
そのため、最初にタープを張って、雨が防げる荷物置き場＆作業スペースを作る。
そして、ドームテント → A 型・ジャンテン を張っていく。 4. ②でも説明
- (キ) 茨城では、春先は意外と風が強い日が多く、初夏は多湿。夏は雷雨や猛暑、秋口も残暑が残り、その直後から急に冷え込む。晩秋も風が強い日が多い傾向にある。冬だが、耐寒キャンプ以外はまずキャンプはしない。特に積雪時のキャンプはまず行わない。

4. テント・タープについて、正しい取り扱い方、標準的な張り方を知り、実践する。

①キャンプ地について、おおよその班サイトのレイアウトが決まったら、まずは地ならし。

○サイトの状況に合わせた、適切な設営をする。

(ア) 地面の状態の確認(草、土、砂、砂利・・・)

草 : グランドシートの濡れや撒収時の原状回復

土 : 雨天時の泥、雨水の流れ

砂 : ペグの刺さり(固定) 具とテントの保持

砂利 : 寝心地

(イ) 土地の傾斜、凸凹、風向き、使い勝手を考えてレイアウト

傾斜 : 雨水の排水方向や寝る方向(出入口との関係)

凸凹 : 雨水が溜まらないかどうか。お尻の下が凹になっていると寝やすい。

風向 : 気圧配置、地方風。陸海風、山谷風等。風が孕まないように(入口は風下に)

(ウ) テントを張る場所の地面の整備

小石・小枝の撤去 : 小豆大の小石が安眠を阻害。マットの活用で緩和。

凸凹の修正 : 基本的にフラットに。おしりの位置は多少凹んでいた方がいいとも・・・。

②張る順序は、「タープ」が一番先で、次いでドームテント。

○まずタープを手早く張って、そこに班装備や個人装備を置く。

○次に「ドームテント」を張って、最後に「班用テント」の順となる(この順序は雨天の場合の設営順序でもあります)。時間的に余裕があれば「指導者用テント」も張ってみる。

ドームテントを先に張る理由は・・・

(ア)「雨」に強く、また簡単に建つため。そして、雨天でもテント内部が濡れにくい。

(イ) 移動が簡単のためレイアウトの微調整がしやすい。

(ウ) 作業着に着替える更衣室となる(特に女子)。

(エ) その中に個人装備をしまっ、タープの下の荷物を少なくし、作業スペースを作る。

○取り出す順序、部品の数量のチェック、収納袋の管理を徹底させる。

たたむ時も折り目、空気抜き、たたむ大きさ、収納順序、負荷のかかり具合等に注意させる。

○具体的な張り方は、「野営法講習会」ノートを参照のこと。

③班用テント(指導者用テント=ジャンボリーテント(ジャンテン))

○具体的な張り方は、「野営法講習会」ノートを参照のこと。

④この STEP1 における意図は、テントをたてる行程とポイントの確認、安全な使用方法を知るという所にある。

野営法講習会では、単に手順書通りにテントを張ることを体験した。テントの構造や力学的なことまでは求めていなかった。

しかし、この Step1 では、実際に各自がそれを知った上で、どのような順序で、どこにポイントを置いて張ればいいのかを考えながら、その意味を実際に作業をして確認することの大切さを認識するところにある。

同時に、それが「安全な使用」に即繋がる。そこに意味がある。(5. 以降に続く)

5. ペグと綱について知り正しく使う。

(ア) ペグ打つ角度は何度がいいのか。ペグをどの深さまで打ち込めばいいのか。

《ペグ》

• 原則は、綱が土に接地しないぎりぎりの高さまで打ち込む。
しかし、十分な保持強度が出れば、途中まででも可。

• 打ち込む角度は、綱に対して 90 度と言われているが、これは理想的環境の場合のこと。地面に対しておよそ 45 ~ 90 度の範囲で、最も利くところ(地面との抵抗等強度が保てる角度)であればいい。

• ペグを打つときは、右の写真のように、差し込み角度を一定にするよう片足をペグに付けると同時に、ハンマーがペグの差し込み角度と 90 度の角度で打ち込めるようにする。



《ピン》

• テントの裾やボトムを固定するピンは、途中までにしてはダメ。返しの部分までしっかり



と打ち込む。 地面と接することで→風がテントの下に孕まないのだ。

(イ) ペグ・ピンが抜けないときはどうするか。

- 先がとがったハンマー等があれば、それをテコのようにして抜く(←写真)。
- 堅い木とロープで、ペグリムーバー(ペグ抜き)を作って、ロープを引っかけて抜く。
- ピンであれば、穴や返しに他のピンを差し込んで抜く。

(ウ) 抜けやすいときはどうするか。

- 予備ペグがある場合は、より太く、長いペグを使用する。
- または、ペグを並べて2本打って、張り綱をその両方に掛け、牽引力を分散する。
- 砂や雪の場合は、ペグを交差させて十字型に縛り、そこに張り綱を掛け、埋め込む。
- 砂利やガレ場でペグが打ち込めない場合は、上のように十字にし、そこに大きな石を載せたり、ネットの袋(例えばタマネギ袋)に石を入れて重しにし、口の紐に綱を結ぶなどが考えられる。(専用のネットも売られている・・・がスカウトなら自作しよう。)

(エ) 地面が凸凹で、一定角度に腰綱が張れないときはどうするか。

- 基本は、屋根やフライの傾斜の延長上にペグを打つ。すなわち、他の綱との角度を合わせる。

(オ) 張り綱や先の輪はどう扱うのか(綱は汚れば劣化するので)。

- 通常綱(張り綱、腰綱)は、テント本体側のグロメット(ハトメ)に固定(もやい結びで。解説書の中にはふた結びでと書いてあるモノもあるが、それだと輪が締まるのでダメ)し、ペグ側にスライダーを持ってきて、長さを調整する場合が多い。
- テント側がD環(Dリング)の場合は、この逆でも良い。この場合、ペグ側の輪はそのままペグに通さない、右写真のようなかけ方をする。
- 綱は汚れば劣化する。(張り綱も同じ)



6. 雨天、夜間の張り綱、テント布地の通気性、換気(換気窓)、雨水の浸入を防ぐソドクロスの正しい設置、また、それぞれの乾燥方法を知る。

- 張り綱は、その材質により、水分を含むと伸び縮みが生じる。(書籍「野営章」P.30に伸び縮みデータあり)
 - 縮んだ場合、ペグが抜けたり、最悪の時はテント本体が破けることもある。
- 耐風索の効果、強風時における設営上の注意(幕体があおられること、ペグが抜けて飛んでいくこと等)を考える。(→入り口は風下に、しかし台風の時は風向きが徐々に変化する)
 - 構造を考え、風を孕まらずにどう受け流すかを考える。ジャンテンでは風は屋根に直角に受ける。ドームでは、基本的に出入口以外の面(局面)で受ける。
 - ペグが飛ばされないよう補強する。(書籍「野営章」P.24に補強方法データあり)
- 雨・露・結露によるテント布地の通気性を考え、換気(換気窓)をどう活用するかについても考える。
 - 綿でできたテント(今はほとんどない)は、水分を含むと繊維そのものが膨らみ、通気性が落ちる。
 - 化学繊維のものは、織り方次第だが、基本的に通気性は悪い。そのためテント内外の温度差が大きいと結露が発生する。通気性を考えた素材を使っているものもある。
 - ゴアテックスのような防水透湿性素材は雨や露は通さず、水蒸気は通す。そのため基本的には気性は損なわれない。
 - これらを考慮し、梅雨でも冬でも、就寝時には「換気窓」を開けておくこと。特に夜間でも結露が起きない程度にあけておくことが大切。
 - テント内で燃焼系のランタンを灯けることは、酸欠等と火災の面から使用厳禁事項の一つであるが、どうしても使用せざるを得なくなった場合は、換気窓を全開にし、かつ出入口も適宜開けて使用すること。あくまでも使用しないことが大原則。
- 雨水の浸入を防ぐソドクロスの正しい設置を知る。
 - ソドクロスを敷いた上に、グランドシートを置く。今のテントのグランドシートは、ウォールが付いて箱(バスタブ)のようにになっている。素材も防水のもの(PVC)を使っている。
 - 一枚布の場合は、側溝を掘ることで浸水を防ぐか、別途を使うか・・・しかないかな。

7. テント本体の乾燥と、グランドシート下の地面の乾燥の方法を伝える。

- どうして乾燥させることが必要なのか
 - 日本的高温多湿の下では、乾燥させることで健康と安眠を得ることができる。
- 乾燥についての考え方
 - Aテン・ジャンテンの場合は、どこを乾燥させるかによって、乾燥方法が異なる。
 - 床を乾燥させるのか、ウォールを乾燥させるのか、扉を乾燥させるのか・・・

つまり乾燥の優先順位を考えさせる。

床を優先的に乾燥させたい場合は、ウォールも扉も蛇腹に折って、通風をよくする。(写真ア)

ウォールや扉を乾燥させたいときは、蛇腹に折らずに広げて乾燥させる。(写真力)

○班用テントの乾燥のポイント

- (ア) 大原則は、濡れた(汚れた)面ときれいな面をくっつけないこと。
- (イ) 濡れた(汚れた)面は濡れた(汚れた)面同士を合わせる。
- (ウ) 扉や腰幕(ウォール)は、ゆったりとした蛇腹折りにする。
- (エ) グランドシートは、取り外して、干して乾燥させる。→同時にテントの床部分を乾燥させる。ロープを張ってそこに掛ける。→また床が草地であれば、その保全に努める。
- (オ) 土砂降りや横殴りの雨でない限り、雨でも乾燥に努める。
- (カ) 撤収時には、全てをきちんと乾燥させる。雨天等の場合は、次ページの写真のように、できる限り乾燥させることを心がけ、帰宅した後天候が回復次第乾燥し収納すること。
- (キ) 幕体本体は意外と乾きやすいが、折り目や綱はなかなか乾かない。それもしっかり乾燥させること。



○ドームテントの乾燥のポイント

- (ア) ドームテントの場合は、建てたそのままの形状を利用することができる。ドームテントは、自立(セルフ・スタンディング)がその最大の特徴なので、それを利用して乾燥を行ってもよい。
- (イ) キャンプの途中であれば、中の荷物をテントの一边(A)に寄せ、その反対側の辺(B)はピンを抜いて、B辺のポールに20～30cm位の足を履かせて(台、つかえ棒)ロープで固定しテントを傾ける。これでボトムと地面の乾燥ができる。それぞれ乾燥したら、AとBをチェンジする。(この方法はあまり勧められないが・・・)
- (ウ) 徹底的に乾燥させる場合は、フライシートを外し、ピンを抜いて、地面が濡れていないところにテントを移動する。そこで、ボトムを上にはっきり返して乾燥させる。なるべく風通しの良い場所で陰干しをする。この時、風に飛ばされないように張り綱を張ることを忘れずに。また、ポールに無理な負荷がかからないように工夫する。

これはは小型・中型のドームテントで可能な乾燥方法。大型のドームテント、特にX(クロス)ポールの構造のものだと、ポールに負担がすすりすぎて折れたり曲がったりすることがあるので、注意が必要。風があるときはやっではないけ。

また、もう一つの注意点は、テントを汚さないこと。土が濡れていない場合にのみこの方法をとってもらいたい。極力、土の上ではなく濡れていない草地の場合でやってもらいたい。特にスリーブ式の場合は、スリーブを汚す→フライシートを汚すことになる。…まさか、フライシートをつけたままひっくり返すヤツはいないでしょうね。

- (エ) フライシートは、取り外して、裏返しに干して乾燥させる。これもなるべく風通しの良い場所で陰干しをする。
- (オ) また、セルフスタンディングの特長は、移動が簡単と言うことだ。テント下の地面が濡れてしまったり、下草を保護する場合は日々、テントを移動させる。
- (カ) 撤収時には、全てをきちんと乾燥させる。雨天等の場合は、できる限り乾燥させることを心がけて持ち帰り、帰宅した後天候が回復次第乾燥させ収納すること。ただし、夏季については、高い気温と湿度で「カビ」が発生するので、極力速いタイミングで乾燥させること。

《まとめ》(5分)

1. テントを張る手順、たたむ手順、乾燥の方法等は、1の方法に限らない。天候、地形、時間、乾燥させる部位等によっても異なる。要は、その場面に適した方法で行うことだ。
2. テント選びは、どんなキャンプで何を重視するか、また、今後どのような班員数・男女比になっていくか等によって異なる。
3. テントのメンテナンスはきちんと行うこと。カビを生やしてしまったテントはもう使えない。



◆ テントの種類

● テントの種類と用途（屋根型テントとドームテント）

ここでは、ボーイ隊の班で使う「班用テント」を中心に見ていきます。

現在市販されているテントは、大きく3種類に分けられます。昔ながらの屋根（家）型テントとドームテント、そして、主に緊急時に使用するツェルトです。ちょっと前に流行ったロッジ型テントは、今は構造がドームテントに近くなってきていますので、ここでは敢えてドームテントに分類します。

さて、屋根型テントには数種類あって、家型テントと呼ばれる「指導者用テント（ジャンボリーテント；略称「ジャンテン」）」と2本のポールで建てる「班用テント（A型テント；Aテン）」、この屋根型テント系のメインはAテンで、これはボーイスカウトやガールスカウト、そして一部の公立の青少年施設や愛好家以外では、今やほとんど使われなくなっています。まさにラストボーイスカウトになってしまいました。

さて、このボーイスカウトが頑なに守っている「家型テント」ですが、そのメリットはどこにあるんでしょう？ 我々 OGE 隊の中もAテン派とドーム派がいます。そこで、Aテン派にそのメリットを聞いてみました。下表 2-1-1 をご覧ください。

・・・とまあ、どっちの言い分にも一理あるけれど、やはりドームのほうが説得力がありますね。ちなみに私はドーム派（笑）。これまでの経験からドームテントの方が快適に過ごせると思っています。

これはボーイの「班」を対象にした5～6人用のテントに対するものです。これより少ない人数では、ほぼ100%がドームタイプのテントになっています。というかAテンは6～8～10人用しかないの

です。ですから選びようがありませんし、残りのテントもツェルトの様な基本的にエマージェンシー用のテントです。

もちろん、4人の班で6人用のAテンを使うことには収容人数の点では問題ありません、Aテンを既に持っているのであればね。でも、これから購入をするのであれば、例えば、ボーイ隊の4人の班で、今後の増員が見込めないとするとAテンにするかドームにするか悩むところ。スカウト数が少ないということは、購入予算が少ないことと搬送人員が少ない・・・に直結していますからね。

4人の班のテントを選ぶとなると、ボーイスカウト・エンタープライズのカタログで比べると、6人用Aテン（写真下左）にするか、モンベルのムーンライト7（写真下右）にするかという選択肢になります。カタログには他にエコテントとスクートがありますが、まあそれは好みでどうぞ。

エンタープライズには申し訳ないですが、私は後者の2つは選びません。「エコドーム」は、重い、室内高が低い、入口の敷居部分が高い、スリーブタイプである（P.000を参照）、形状が風に弱そう・・・です。「スクート」は重すぎるし、もろ風に弱い構造、この重量をあの高さまで吊り下げるのはボーイ年代のスカウトでは結構つらいでしょうね。あ、あくまでカタログを見た感想です。実際に使ったことはありませんから。

それから、今は女子のスカウトが多く入って来ていますから、キャンプでは、テントは男女別に用意しなくてはなりません（チャイルドプロテクションにも明記されていますが、っていうか男女別テントは指導者の常識ですよ。たとえばカブであってもです）。つまり6人班だからといって6人以上用の大型テントを選択することはないのです。今後は1班にテント2張は標準となっていくでしょう。

●表 2-1-1 家型テントとドームテントの比較

比較項目	家型テント	ドームテント
耐風性	○丈夫で、あれだけの綱とペグで地面に留めているんだから風に強い。 ▲家型テントは、風を面でがっちり受け止めるのでものすごい風圧がかかる。そのためには相当な力を幕体、綱、ペグでそれぞれ保持しなければならないから高い強度が必要。つまりひとつひとつが丈夫で重い。それに風に負けてしまった場合にペグが抜けて飛んでいくこともあり大変危険。	○今のドームは構造工学に優れた形状であり風を受け流す。その点でもジャンテンはドームテントに敵わない。強風時にはドームでもペグや張り綱は必要だけど、綱の太さも数とも少なくてもいい。
居住性	○棟が高いので居住性が高い、また幕布が厚いので特に長期キャンプで安心。あの安心度はドームでは得難い。▲棟は高いが、三角屋根のため上方空間は狭い、小柄なスカウトではリッジポールに届かない。厚い帆布で構成されているので、頑丈というイメージで安心感はあるが、何もそんな厚い壁で囲わなくなっていくといいでしょう。	○同じ収容人数であれば居住性はドームテントの方が格段に上である。自然との一体感はドームに敵わないよ。
グラウンドシート	○グラウンドシートが縫い付けられていないので、濡れや尖ったもの等への対処がしやすく自由度が高い。フロアは長方形なのでコットを置くにはちょうど良いだろう。	▲フロアは縫い付けられて防水処理がされているので、地面が水浸しになっても大丈夫。 ×コットを置くには脚の先でフロアシートを傷めない工夫が必要だな。
設 営	○きちんと張るためには、テントの構造を知らなければならず、幕にテンションをかけるのに総合的な知識がいるところに教育的意義がある。	○ドームテントは早く張れるのでプログラムに時間が割けるし、張ってからからも簡単に移動もできるので、風向きの変化にも、植物へのローインパクトにもすぐに対応できる。

◆ テントを選ぶ

では、実際にボーイ隊やカブ隊、ベンチャー隊が使うという設定で選んでみましょう。家型テントについては、選択の余地がないので、ここではドームテントについて書いていきます。

●ドームテントについて

さて、「ドームテント」って一言で言っていますが、ドームテントは実にいろいろのタイプがあります。

まず、テントを分類してみましょう。

「目的」別に、山用か、雪山用か、我々のような低山用か、ファミリー用か、オートキャンプ用か…となります。次に、構造や重量で見ると、ポールの数やポールの組み合わせ方、設営のしやすさ（つまり固定キャンプ用か移動キャンプか）でも分けられます。他には、収容人数別もあるし、素材別でも分けられます。

ということで、テントを選ぶときに、選択要素にプライオリティをつけると

①目的 ②収容人数 ③構造・重量 ④その他
となります。では、それぞれについて見ていきましょう。

①目的

テントの購入にあたっては、使用「目的」は最も大切な要素となります。数あるドームテントも、その使用目的により大きく区分されていきます。

例えば冬山用のテントは、夏のボーイ隊の低地でのキャンプでも使えます・・・が、まず暑くて快適に過ごすことはできません。ファミリーキャンプ用の安価な大型ドームテントでX（クロス）ポールのもは、低地&平地のスカウトキャンプの様な長期のキャンプには良さそうですが、実はボーイ部門のキャンプには不適だったりします。好天であれば問題はでないでしょうが強風・荒天だと、大きさが大きなのでテントの耐性に問題が生じて安全が確保できないという事態が生じることがあります。（写真右下）

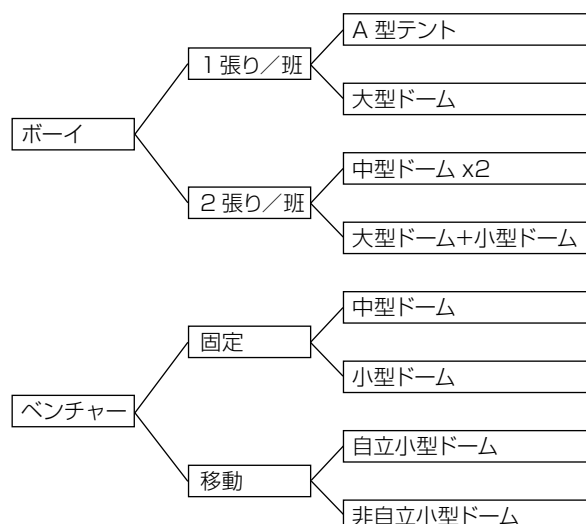
ボーイスカウトの場合は、「教育」のためのキャンプであり、基本的に過酷な条件下はまずあり得ません。そのフィールドは、ある程度整備されたキャンプ場だったり、多少野性味が残る山林でしょう。その低地の平地で、隊指導者の管理の下での固定キャンプが主となります。また、今はテントを含め荷物はキャンプ地まで車で運ぶコトがほとんどとなっていますので、重量よりも丈夫さや機能性に目を向けた方がいいかもしれません。ただ、スカウトの数は毎年変わるのである程度の増減に対応しなくてはなりません。男女比も変わります。ここをどう考えるかは、団・隊で判断する必要があります。

ベンチャースカウトの場合は、固定キャンプもありますが、バディでの移動キャンプも行います。移動キャンプでは、必要なギアを全て背負って移動するわけですから、ギア1つ1つの重さをでき



るだけ減らさなくてはなりません。もちろんテントもです。しかし、移動キャンプの目的にもよりますが、軽さだけを追求して居住性を犠牲にするようなことは避けた方がいいです。十分な睡眠がとれない結果、疲労が蓄積して「楽しいスカウティング」ではなくなってしまいますから。

ここに簡単な分類図を示します。まあ、このレベルだったら示さなくたって解っているとは思いますが・・・。



●図 2-1-3 部門別キャンプ形態と使用テント

②収容人数

テントが1張りだろうが2張りだろうが、班員全員が寝られ、かつ荷物が置けるスペースがあることが必要です。メーカーが表示しているものは、一昔前であればJIS規格に基づいた表示となっていました。JIS規格が1999年に廃止となったため、今ではメーカー独自のものとなっています。JIS規格では、「人+荷物」で200cmx55cmですので、ボーイ隊のキャンプのように個人装備をテントに入れる場合は、入れ方や整理の仕方にもよりますが、表

●表 2-1-2 家型テントと代表モデルのスペック比較

区分	型式	人数	価格	重量
家型テント	A型6人用	6	¥106,000	22.4kg (本体) (ポール・ペグ・ハンマーは別)
ドーム	エコテント	5	¥102,900	12kg
	スクートDX6	5	¥75,600	9kg (11.6kg フレーム含む)
	モンベル ムーンライト7	5(7)	¥62,800	7.8kg (8.4kg ペグポール含む)



◎指導者用テントに寝てみた。
普通体型が3人、FAT系3人の成人男性だと、このようにいっぱい。荷物を置くスペースはなかった。

示人数分の人を収容するのは難しいですね。よく「実質人数＝表示人数－1 (or－2) 人」と言っているのはこの名残です。

まあ、人数が多くてフロア（テントの床）に荷物のスペースがとれないときは、それこそ創意工夫の出番です。そのひとつとして前室があるタイプを選んでおくのもいいですね。

ということで、多くのメーカーでは、そのメーカー独自の人数表示をしています。その表示人数には個人装備のスペースも含まれているようですが、統一の規格ではないので、必ずシップ等で現物を確認（実際に荷物を置いて寝てみる）してからご購入ください。

③構造・重量

「目的」のところでも述べましたが、ボーイの「班」で使うテントとなると大型ドームが選択肢に入ります。しかしながらテント本体が大きく立ち上がるわけですから、風の影響を大きく受けることになります。そこでしっかり考えていたいただきたいのが強度と安全性です。ポールが2本のクロス(X)ポールタイプでは、強風時にポールが耐えられなくなり、ポールの湾曲の形状が保てなくなったり折れたりします。(写真左。実体験としては、台風の下では、あの頑丈そうなジャンテンのポールでさえも台風の時はあっさりとかぶってしまいました。当時需品部で売っていた「アドベンチャーテント」の樹脂ポールも簡単に折れてつぶれていました。)風の力は予想以上に凄いのです。ですから、大型ドームテントの場合は、できればメインのXポールに補強のサブのポールが組み合わされたものやジオデシック構造のもの、1つの大型ドームではなく中型2つにすることをすすめます。ちなみにこの台風のときが私の個人テント「モンベル・ムーンライト5」のデビューだったんですが、何の問題もなく快適に過ごすことができました。(ちなみに私はスカウトの避難引率で体育館にいましたので。これは残留組による報告です。)

耐風性については、ポールの数だけでなく本体とどのようにジョイントさせるかによってもその強度が異なります。これについては「ポール」のところでも述べます。

また、中型小型のテントであれば、入口の位置やフライシートの形状についても考えなければなりません。これについてはP.000を参照してください。

次に重量ですが、前ページで「重量よりも丈夫さや機能性に目を向けた方がいいかもしれません」と書いていますが、これはまずAテン以上の重さのテントはない！ということと、固定キャンプの場合でも、今では班装備を背負って歩いてキャンプ地に行くことはほとんどなくなって、ほとんどが車による搬送で、実際にそれを持って歩く距離は、ごく短距離であるということ・・・との考えか

らのものです。しかし、ボーイ隊の現状を見ると女子の数が多くなっている、上級生の参加率が下がってきて小学生がメインとなっていること等を考えると、これらのスカウトでも取り扱える重さであることが大切な要素となります。さらに、ジャンボリーだと延々と歩くことになります。

そして「移動する」ことを考える必要があります。特にベンチャーローバーの移動キャンプの場合はできるだけ装備重量を軽くしたいのですから理解できますよね。装備の軽さはキャンプでの疲労を軽減することにダイレクトに繋がりますからね。

また、環境保護、つまり植物の保護の観点から、3日に1度はテントの位置を移動するようにと言われてます。それに、風向きによってテントの出入口の位置を修正しなくてはなりません。Aテンでは大変なこの作業ですがドームだとさほど難しくはありません。しかし、大型で重量のあるドームテントでは、転回・移動はそれでもけっこう面倒です。

従って、これらのことに対応するためには、必要な強度を保った上でできるだけ軽いモノであることが求められます。それはテントやポールの素材に大きく左右されてきます。これについては次で述べます。

●テントの生地素材

テントの素材に良く使われるのは化学繊維の「ナイロン」と「ポリエステル」です。昔は木綿やビニロン製のテントもありましたが、今はほとんど見かけません。

ナイロンは引き裂き強度に優れ、程よい伸縮性もあるのでテントをきれいに張ることができます。布の厚みは糸の太さのデニールという単位で表します。15デニールであれば、向こう側が透けて見える薄さのものとなります。ドームテントのウォール（本体）には50～70デニール、フライシートはそれよりもやや太く、フロアであれば100デニール以上のものが多く使われているようです。

ポリエステルは伸縮性には欠けますが、ナイロンよりも強く、紫外線による劣化も少ないのでフライシートに多く用いられます。ちなみにジャンテンとAテンは本体・フライともにポリエステルです。収縮性は必要ないので。

このほかにグラウンドシートにはPVC（塩化ビニール）が使われることがあります。PVCはほぼ完全防水で、しかも丈夫なのでテントのボトム（底）には最適ですが、重いのが難点です。

●テントの大きさ（サイズ）

①班・組で使うときは6～8人用

テントのフロア大きさは、班の人数構成、男女比にもよりますが、同性のみの班だと6～8人用のもの、男女混合班だとその人数比に合ったモノを選ぶことになります。

●表 2-1-4 シート素材の主な特長

素材	耐久性	強度	防水性	価格
ナイロン	強い。薬品力 び害虫に強い (日光やガスで 黄変する)	高強度	高い (耐水圧による)	高い
ポリエステル	引き裂きに強い、紫外線に 強い (長期間の使用 可能)	高強度(ナイ ロン以上)	高い (耐水圧による)	高い



◎比較的に安いのでよく使用されている某C社製テント(左・右)。強風の下では構造上このようにポールが当初の形状を保つことができなくなってしまう。

テントの大きさというと、すぐに「フロア（床）」の面積を思い浮かべてしまいがちですが、もちろんそれも大切ですが、ウォール（壁）の立ち上がり角度や天井までの高さにも注意してください。つまり、居住性です。テントは寝るだけでなく、雨の時はリビングにもなり、場合によっては食堂にもなります。2人用と6人用とでは、出入りに必要な高さも異なってきます。無理なく着替えができ、かがんで立っても無理なく出入りできる室内高はほしいですね。

テントの利用（就寝）人数表示は、「○人用」とか「○人相当」とか「キャパ○人」、あるメーカーでは「商品名の最後の数字が目安となる人数を表示」となっています。この人数ですが、だいたい荷物がなければこれだけの人数が寝ることができるという目安の人数のようです。更には昔のJIS規格のゆうに「この人数が寝られる」という広さであって、快適に寝られる広さであるとは限りません。しかも、この「快適」な広さの基準が人それぞれ違っているので、ショップ等で実際に目的のテントに横になってみて、個人装備をおいたらどうなるかを確認することが、納得するモノを選ぶポイントになります。ちなみに、OGE隊においては、2人分で1人が快適であると換算しています（人+個人装備）。5人用であれば2人（小数点以下切り捨て）、これ以上の大きさであっても最大3人で使っていますね。

ボーイ隊の班用テントとして使用することを考えると、実際の就寝人数は表示人数マイナス1～2人と考えてもらっていいでしょう。

カブであれば、ほぼ表示人数が収容できます。

②ベンチャーは2～4人用

ベンチャーやローバーとなると、活動が基本的にソロかパディカという単位となり、また、全てのギアを背負っての移動キャンプも視野に入れることが必要となるので、2～3人用のテントを選択することになります。

ベンチャーやローバーでも長期に亘る移動キャンプだったり、雪中キャンプだったりをする場合は、快適性をとるか重量を取るかをの選択を迫られることになります。少しでも軽くすることを選んだ場合は、余分なスペースを作らないで規定の人数の通りモデルをチョイスすることがベストとなります。小さければ小さいほどポールも細く、布地も薄くできる → つまり「軽い」わけです。こういう場合、2人以上であれば足と頭を互い違いにして寝て、荷物は足下か頭の上に置き、マットは半身用にシマット代わりバックパックに足を突っ込んだりすることで、人と人との隙間が埋められて、寒い時期でも暖かく眠ることができます。（暑いときは、うっとうしいだけです・・・くさいし、くさいし、くさいし!!）

③登山用は1～2人用

登山をするのであれば、1～2人用のテントがいいと思います。それは単純な理由なのですが、山では限られたキャンプスペースに

たくさんさんのテントが立ち並びます。トップシーズンになるとテントがひしめき合っている状態なのです。小さいテントであればテントとテントの間にわずかなところにテントを何とか張ることもできますが、3～4人用ともなると、そのスペースを確保することはまずムリです・・・というワケです。

●テントの出入口

使うテントが小さいソロやパディのキャンプなら気にならないですが、班で使うテントとなると、出入口の位置や大きさ気になります。これもテント選びの大きなポイントになると思います。

一昔前のドームテントだと出入口が1つしかなくて、出入りするだけで、寝ている人には大迷惑になることがありました。Aテンやジャンテンは昔から出入口は2つありました。今は大型のドームテントであれば、対向する面にそれぞれ出入口があります。

出入口の大きさについては、小型のテントであれば座った状態で入りしますが、大型のテントだと立ったまま（屈んで）出入りするのが普通となっています。無理なく出入りできるもののがいいですね。屈んだときに気をつけなければならぬのが、入口の下端（敷居）の高さです。これがフロア面から高いと、足をしっかり持ち上げないとつまずいてしまいます。

小型テントは座って出入りするわけですが、この場合も敷居が高いと出入りしづらくなります。また、小型テントの出入口の位置ですが、フロアの長方形の短辺に出入口があるモデルだと、ポールとポールの感覚が狭いので、当然、狭い入口しかとれません。出入しやすくするためには、その面をフルに使う、すなわち入口の上端が天井近くまでくことにし、今度は雨が入りやすくなります。小型テントでは、長辺（ポールとポールが離れた面）に出入口があり、かつ出入口の地面からの角度が大きいものの方が使い勝手はいいと思います。

●ポールの素材と構造

ポールに求められる性能は、テントの形状を保ちつつ、風に対しては、柔軟性あるものとなります。Aテンやジャンテンと違って、ドームテントの場合は、テントそのものに柔軟性を持たせ、風の圧力を逃がすワケですが、その要となるのがポールなのです。

柔らかくて強度があり、戻り特性をもつ材質としては、スチール、FRP、アルミ合金などがありますが、それぞれ特長（一長両短）があります。（下表参照）

結論としては、アルミ合金（#7000系超々ジュラルミン）がいいでしょう。更に強度面を考えると、2本クロスだけではなくサブに1～2本あるものの方が気分的に安心できます。あ、サブといっても「補強」のためのサブですよ、フライの張り出し用のサブじゃないです。A型フレームやジオデシック構造のものであれば言うことはありませ

●表 2-1-5 テントポール用素材の主な特長

材質	特長
スチール	強度はあるけれど、重くて、柔軟性も低く、太い。そのためたわみが少なくても済む場所、ファミリー用大型ドームテントのサイドポールやキャンピーの支柱用に多く使われます。
FRP	スチールより軽量で弾力性があり、かつ安い素材なので、あまり重量をキャンブにしないエントリーモデルに使われています。また、ポールのジョイント部分が金具なので、スリーブに通すときに引っ掛かりやすい。
アルミ合金（ジュラルミン）	強度と柔軟性があり、軽量の素材。径も細くできる。段差なくジョイントできるので、スリーブを傷めることが少ない。但し高価であるため上級モデルに多く採用されている。

●テントは「建てる」「立てる」？

この表現は本によって様々です。この本では敢えて「建てる」を使います。テントはスカウトにとって野外での「家」ですから、建てるです。でも・・・「張る」が正しいんじゃないのかな。

ん。

ポールが少なくてもフライをきっちと張ってペグを打っておけば、それなりの強度は出るものです。そうは言っても2本ポールのクロス(X)だけでは安心・安全には心許ないです。大きいテントでXポールだけのものは、荒天時にはさっさとキャンプを切り上げて帰るか、避難できるところがある場合にしか使用できないと考えてください。

あ、これは6～8人用の大型ドームテントの場合であって、1～2人用の小型ドームであればXポールでも大丈夫でしょう。3～4人用の中型ドームでは、やはりサブポールがあるものやAフレームのものをすすめます。

●ポールを本体のジョイント

テントをたてるには、ポールをテント本体に取り付けなければなりません。その取り付け方法には、本体のスリーブ(筒)にポールを通す「スリーブタイプ」とフック等で本体をポールに吊り下げる「吊り下げタイプ」に大きく分けられます。

スリーブタイプはポールをつないでスリーブ(筒)の片側から入れ、入れたポール先を固定した上で、更にポールを押し込んでポールをたわませテントを建てます。基本的にクロスしているの、特に大型・中型テントでは2人で同時にその作業をしなくてはなりませんし、押し込む時に結構な力が必要となります。

一方、吊り下げタイプは、まずポールをたわませ、その両端をテント4隅に固定します。次に、センタートップのフックをポールの中央に掛けた後、上から順番にフックをポールに引っかけていきます(この順番はテントにより異なります)。スリーブタイプよりも簡単で1人でも建てられますが、例えばモンベルのムーンライト7の様な大型ドームテントの場合、カブのような低い身長だと、テントのセンタートップのフックをポールに取り付けることが難しくなります。

どちらが設営が楽かは、経験次第です。吊り下げ式の方が初心者やカブ年代には向いているかもしれません。

さて、大型ドームテントは風に弱いと前に書きました。全てのタイプがそうというわけではないのですが、スリーブ式でもフック式でもそれだけでポールに固定しているのであれば、風圧でフライやテント本体がたわむことで、スリーブやフックの接点(面)がずれてしまいます。そのズレが大きくなるとテントが本来の形状を保てなくなり、全ページの写真のようにつぶれてしまうのです。テントは正しい形を保つことで最大の保持力を発揮するよう作られています。テントは眠るだけでなく、悪天候時の避難場所にもなるのですから、この点にも注意することが大切です。その対策として、フックがずれない構造になっているもの、スリーブが伸びない素材になって



いるもの、モンベルのムーンライトシリーズのようにA型フレームで要所がゴムで固定されているもの等があります。

●スリーブタイプの問題

さて、ここでちょっと夏の炎天下のキャンプを考えてみましょう。夏の炎天下にテントに入った人はよく解っていると思いますが、テントの中は相当熱くなります。それを防ぐのがフライシートの役目(もちろん雨を防ぐことも、冬の寒さも)だとしても、それにも限界があるでしょう、だから熱いのはしょうがないじゃないですか……ん～、ちょっと待ってください! 正しく設計されたテントを適切な用途で使ったならば、そしてフライシートがちゃんと張ってさえあれば、中は耐えられない暑さにはならないはずです。

ではどうしてテントの中が耐えられない暑さになるのかを考えましょう。それは、太陽熱で熱せられたテントとフライの間にある空気の塊が熱を持って、それがテント本体の幕から中にモロに伝わるからです。「そんなことは知っているよ! 具体的にはどーゆーことなの?」

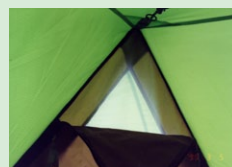
はいはい、お答えします。それは、テントとフライの間にある空気が、ポールを通すスリーブによって仕切られたコンパートメント(小部屋)になって閉じ込められてしまっているからなのです。

フライシートは、テントのスリーブに載せるように接して張りますね。つまり、テントとフライの隙間はスリーブによる壁ができて、そこに空気が密閉空間された小部屋を作ってしまうのです。つまり流れ出さないデッドエアです。そのため太陽熱はフライ通してデッドエアを熱し、その熱がテントの内部に伝わっていくわけです。その熱の伝導を防止するために、スリーブが途中で切れていたり、メッシュになっている等の工夫がされています。これであれば熱気が移動するため夏でもとりえず使うことができますね。

「冬であれば、このデッドエアによってテントの中が暖かくなっているじゃん」ということも考えられますが、その通りです。この場合はフルタイプの裾が付いた冬用のフライ(スノーフライ)を使えばいいのです。これはフライの裾を完全覆うもので、裾から空気が入り込



◎写真左はスリーブ式(アライテント)。中はスリーブ+フックのハイブリッドタイプ(コールマン)。右は吊り下げ(フック)式(モンベル)。



◎ベンチレーター。写真左はウォールの上部にあるもの。右はウォールの下部にあるもの。

まないのであります。

一方、吊り下げタイプでは、基本的に遮る壁がないから、テントとフライの間を自由に空気は流れていきます。つまり、熱の籠りはスリープタイプに比べたら相当少なくなります。

暑い時期には、テント本体とフライの間に隙間を作って風を通すことは、キャンパーの常識とも言えますね。

※前述でフルタイプのフライのテントがいいとしていますが、いかに風の通り道が作られているかについてもチェックが必要です。

・・・と、ここまでは主に「夏」の話でした。みなさん「結露」ってご存知でしょうか？ 冬に家でストーブをガンガン焚いていると、窓ガラスの内側にびっしりと水滴（露）が付いていますよね。アレです。あれがテントの中でも起こるんです。テントの中の空気が、スカウトの息や身体から発散される水蒸気と体温で満たされたところに、テントが周りから冷やされると、外気と内気の間にある幕（布）に触れた水蒸気冷やされて露となるわけです。これの対策としては2つあるんですが、その1つが先に述べた「スリープタイプ」。このコンパートメントでデッドエアをためるんですね。要するに外気温が直接テントにつたわないために、結露がすくなくなるのです。もう1つの方法は次項の換気による方法です。

●メッシュの換気窓（ベンチレーター）

基本的には、充分に換気ができる「窓と扉」（ベンチレーター）があることが必要です。特に大型・中型テントでは扉を含めて4方向に、小型テントでも2方向にほしいところです。

出入口が2つあるテントでは、入口と出口は基本的に対向する面に設けられています。両方とも大きく開くのであれば換気上は特に問題はありません。しかし、例えば、真面目な新入隊員などキャンプに不慣れな人は、夜間の出入りの時にテントの扉を無意識に全部閉めてしまうことがあり、そういう場合に他にベンチレーターがあれば換気を確保できます。また、日本では昼と夜で風向きが異なるところが多いので、4方向にベンチレーターがあれば快適に過ごせます（いちいち風向きに合わせてテントに入口を移動しなくてもすみます）。

また、今派のテントはフルフライタイプが多くなっているため、テント本体（インナーテント）には、通気性を持たせたものも多くなっています・・・が、それでもベンチレーターは必要です。

なぜベンチレーターが必要かというと、人の息に含まれる二酸化炭素や水蒸気、身体から発散される熱や水蒸気、その他口臭や体臭などを素早く排出し、新鮮な空気を取り入れるためです。また、前項の「結露」の原因となる水蒸気と温度も下げることができます。

特に、酸素が不足したり、二酸化炭素の濃度が高くなりな

に気をつけてみましょう。もちろん一酸化炭素もです。一酸化炭素の方は、テント内で炭を焚くな、ガソリンランタンを灯すな、ストーブをつけるななど一般的に言われているので、安全意識がはたります。が、二酸化炭素には意外と注意を払われていません。息苦しくなるから程度の認識です。

狭いテントで寝ているとき、人の息に含まれる二酸化炭素がテント内に徐々に排出されます。呼吸によって酸素が消費され、二酸化炭素が増えます。空気中には酸素は約 20% ありますが、扉や窓を全部閉めきっていると、二酸化炭素はどんどん増えて、更に空気よりも重いので、テントの下の方、つまり寝ている人を包み覆っていくのです。そのため多くの人が寝ることによって必要な酸素が不足して(12% 以下になると) 窒息してしまうというコトが起こり得ます(いわゆる「酸素欠乏症」そう酸欠の原因)。二酸化炭素は普通の状態では 0.03% 程度しか空気中に含まれていません。それが 5% になると頭がボーッと、10% を越えると身体が震え耳鳴りがし、意識がなくなってしまうとのことです。(こんな濃度に達することはまずありませんが！) 最近のテントでは、ベンチレーターがボトムの辺りの低い位置についているものも出てきました。

もちろん、ベンチレーターがあっても、それが閉じられていたら意味がありませんが、特にドームテントでは密閉性がいいことから、きちんと機能するベンチレーターが必要となります。同時に、どの程度それを開けるかも知っておかなければなりません。これもテントによってまちまちですので、実際に使ってみて状況に応じた開け具合を研究してください。

また、窓やベンチレーターにメッシュの網が付いていれば虫が入ることを防止できます。虫がいるところで使用する場合は、メッシュ付を勧めます。冬山用は吹き流しのような形状で先が巾着のように絞れるようになっています。ちなみにメッシュはついていません。

私は、冬でも横窓のベンチレーションは半分以上は開けています。夏は全開です。(ちなみに使用テントは前述の「モンベルのムーンライト 5」です。P.42 下写真)

●テントの色

通常我々が使っているテントはアースカラー系の自然に溶け込む色合いのモノが多いですね。各社のラインナップもその傾向となっています。アースカラーは、身近にある自然物に似た色合いですから、目にも優しいですし、色による精神的なストレスもほとんどありません。自然の中でゆったりと安らぐために適した色合いです。

それに対して山岳用テントは、視認性を考えて、とにかく目立つことを第1に考え、赤系や黄色系の目立つ原色系の色づかいとなってい

●表 2-1-6 主なメーカーの（ボーイ班用？）ドームテントのスペック比較（重量・価格は付属品込み）

メーカー	型式	フライシート			テント本体			インナー Top 高さ	難燃 加工	ポール 材質*	全重量	価格
		厚さ*	耐水圧	UV	フロア厚*	耐水圧	フロアサイズ					
スノーピーク	ランドブリーズ 6	P75D	1,800mm	不明	P210D	1,800mm	300x300	H165	×	7001	9.7kg	¥62,800
コールマン	タフワイド ドーム 300	P75D	2,000mm	○	P210D	3,000mm	300x300	H190	不明	ジュラルミン	11.2kg	¥44,100
モンベル	ムーンライト 7	P75D	1,500mm	不明	N210D	2,000mm	280x280	H175	○	7071	8.4kg	¥62,800
小川テント キャンパル	スクート DX6	P75D	1,800mm	○	PVC	10,000mm	280x280	H180	不明	7001	11.6kg	¥86,100
ロゴス	プレミアムジオ ドーム 270-L	P 不明	1,700,mm	○	P 不明	3,000mm	300x300	H190	○	7075	10.0kg	¥36,399

* P：ポリエステル、N：ナイロン

* #7001,#7075 は、超々ジュラルミンの種類

ます。これは遭難した場合の捜索で発見しやすいからです。熊よけという話も聞いたことがありますけど・・・。

キャンプの目的がリラックス、リフレッシュなのであれば、真っ赤なテントの中では過ごしたくありません。かえって気分が悪くなってしまう。しかし、山に登るという相当のリスクを伴う行動をする場合には、こと色づかいについては視認性を最重視しなくてはならないのですね。(んー、だったら秋の紅葉時期にはどうすんだろ。紅葉と一体化しちゃうじゃないの?)

それと、ほとんど関係ないだろうけれど、虫を寄せ付けやすい色(赤系)、熱を吸収しやすい色(暗い系)、反射しやすい色(銀・蛍光色)ってのがあります。そんなのも考慮してみましょう。

●テントの防水

防水とは水を通さないこと、撥水とは水を弾くことをいいます。

テント生地の中でも、フライシートとフロアは、通常ウレタン樹脂やアクリル樹脂をコーティングして防水加工した上、外側に撥水処理が施されています。ただし、フライ付のテントでは、ウォール(本体)には防水加工が施されていない、撥水加工に留まっていることが多いようです。防水については、普通は上からの雨のことを考えていますが、それだけでなく地面の濡れへの対策についても考えなくてはなりません。

布状のモノを箱形にするのですから縫ったり溶かして接着するなどの加工が必要です。溶融加工は防水性が確保できますが、縫い合わせる場合は糸を通すための針穴があいてしまうので、そこから浸水が起こります。その穴を塞ぐものがシームシーリング剤です。チューブの液体状のものとシームテープがあります。シームシーリング剤は縫い目にそって表裏の両面からうすく塗布し、よく乾燥させてください。シームシーリング剤は時間とともに硬化してきます。剥離したときには塗布しなおしてください。シームテープは、テープの片側が接着面になっていて、縫い目の上から覆うようにそれを貼って、アイロンで熱を加えて圧着することで防水します。

今のジャンテンやAテンのグランドシートは本体とは別になっており、PVCの布をバスタブ型に折って整形し、多少の冠水でも水が入り込んで濡れないように継ぎ目や織り目は溶融接着されています。ドームテントでは、生地素材はほとんどがナイロンでそれが糸で縫い合わされています。基本的にはシームテープで縫合面に防水処理をしています。フライシートのベンチレーター部やファスナー部分、ボトムシートの一部など、製造の都合上または構造上シームテープが施せない部分にはシームシーリング剤が充填・塗布されています。

多くの場合ウォールとフロアの縫い目には防水加工はされていないようです。有名メーカーのものであれば、購入した状態でも通常の雨には十分対応できますが、長時間の大雨や横なぐりの雨、地面に雨水が溜まっているよう磁状態では、縫い目から雨水が侵入することな

いとはいえないので、必要に応じて縫い目にシームシーリング剤(目止め液)を塗布してください。

このように、買う際には縫製部分にはシームテープによる防水処理が施してあるか、それらが隙間なく溶融接着されているか、コーナーの立ち上がりの全ての縫い目にはシームシーリング剤の防水処理がされているかを確認します。これは大きなポイントとなります。

ただし、シームテープも完全ではありません。長年使っているうちにシームテープが剥がれてしまうことがあります。その場合は、アイロンを使って再度貼り付けるか、新たなシームテープを貼るかのどちらかになります。シームシーリング剤は縫い目にそって表裏の両面からうすく塗布し、よく乾燥させてください。シームシーリング剤は時間とともに硬化してきます。剥離したときには塗布しなおしてください。

もちろん、メーカーに修理を依頼することも可能です。モンベル、スノーピークはほぼ全部の修理を受け付けてくれますが、外国のメーカーのものについては、修理をしてくれないモノもあります。スカウトであれば、プログラムの一環として、自分達でこれらの処理はしたいものです。

さて、テント生地そのものの防水性については、その強さを「耐水圧」で表しています。その値は、傘で500～1,000mmとされています。レインウェアなんかだと20,000～40,000mmなんでもものもあります。実際にこの数値がどのレベルを表しているかやその有効性については研究したことがないので、ここではいくつかの有名メーカーのカatalogスペックでテントの防水性を判断することにします。モンベルでは1,500～2,000mm、The North Faceでは1,500mm、スノーピーク3,000mm、コールマン2,000mmとなっています。トップメーカーであるこれらが採用して製品化しているのですから(もちろん実証しているんでしょうから)、このくらいあればよろしいでしょう。

防水で思い出すのは、10年ほど前のWB研修所のことです。ビーバーとベンチャーコースが併設だったため、参加者用にホームセンターで新たにコールマンのドームテントを購入しました。2日目から大雨になり、3日目の朝に参加者の1人がSOSを求めてやってきました。テントが水没したというのです。あわてて現場へ行くと、なるほど凹地に張っていたために水深約20cmほどの水たまりにテントが浮いていました。いや正確には浸かっていました。中はびしょびしょで悲惨な状態になっているだろうなぁと覗いてみたところ、中では参加していたOGE11が嬉しそうにゴロゴロとごろごろ回っているのです。

「???」

するとOGE11曰く

「ウォーターベッドですよ!」

・・・と。新品だったからでしょうが、全く水漏れ無し。完璧。コールマン恐るべしでした。



スノーピーク
「ランドブリーズ6」



コールマン
「タフワイドドーム300」



モンベル
「ムーンライト7」



小川テントキャンパル
「スカウトDX6」

●フライシートの形状

次にドームテントのフライシートについて見ていきましょう。機能や材質については、先に述べた通りです。ここでは、その形状とその機能性について述べていきます。

まず、フライシートは入口(前室)もふくめて全部(裾は除く)を覆う「フルタイプ」のフライであることは絶対条件と書きました。その理由はいくつかあります。

まず、耐候性。要するに天気に対するものです。雨を遮る、日光を遮る、保温する、風を受け流す等の性能がここでは求められます。

「雨を遮る」については、防水性のトコロでも述べたように、多くの場合ウォールとフロアの縫い目には防水加工はされていません。つまりここに雨が当たるとその縫い目から水が浸入してきます。それを防ぐためにもこの部分がフライに覆われていることが必要となります。

「日光を遮る」については、「スリーブタイプの問題」でも挙げましたが、フライとウォールの間の隙間の空気をよどみなく流して行くことが必要となるわけです。

「保温する」は、スノーフライを使うか、フライの裾を雪で覆ったり、落ち葉で覆ったりして空気の流入を防ぐことでデッドエアを作り出すことが保温に繋がります。かつて解体して広げた段ボールを縦長に切って、それをぐるっとテントの周りに立ててピンで留めて、風の侵入を防いだことがありました。効果は・・・という、余りに寒くて、また比較のしようがなかったので解りませんでした。普通のドームテントで雪中キャンプをする場合は、雪のブロックを積んだ壁でテントの周囲を覆うことで風がフライの裾から入るのを防ぎます。

最後は「風を受け流す」です。基本的にドームテントは曲面で構成されていますから、家型テントのように「面」で風に正対して踏ん張る必要はありません。ドームテントでも小型～中型のものであれば問題ないでしょうが、大型の背の高いドームテントだと、ポール強度やフライシートの形状が耐風に大きく影響します。特に前室部分がオーニングとなっているテントはオーニングの面に傾斜があっても基本的には平面ですので、もろに風圧を受けています。開閉する際には注意が必要です、ポールの材質や構造がヤワだとつぶれてしまいます。三角形に張り出したモノの方が風を切ってくれるのはいうまでもありません。オーニングの面では風を受けないようにします。

●ドームテントのグランドシート(ボトム)

家型テントのグランドシートではなく、ドームテントのフロアの下に敷くシートのことです。テントの下にグランドシートを敷くようになったのは、いつの頃からでしょうか。今は有名メーカーのカatalogにもその商品が掲載されています。

どうして、テントの下にシートを敷くのでしょうか。汚れ防止? 防水対策? 保温性アップ? 何れもピンと来ません。この本を書いた

めにいろいろと調べていたところ、なるほどという記事に出会いました。それは「それまでテントのフロアはPVCが主役だったが、ドームテントが主流になってから、軽量化のためにナイロンやポリエステルに防水加工したものを使うようになった。PVCに比べて薄目のテント底に不安を感じたのとそれを保護するためにグランドシートを敷くようになった」とのことです。なるほど。

でも、前述のちゃんとしたテントメーカーならボトム(テントの床・底)に適した厚さの素材を使っていますし、防水性能もそう簡単に劣化することはないはずです。モンベル150デニール、The North Face 70デニール、スノーピーク300デニール、コールマン210デニールとなっています。

そういえば、ウチのカブ隊もブルーシートをフロアの大きさに揃えて折って敷いています。まあ、ウチの場合は経年劣化によりフロアの防水性能が劣ってきたための対策です。よく見るとフロアから大きくはみ出しちゃっています。それじゃだめでしょう。それだと水を招き入れちゃうでしょう。ったく。

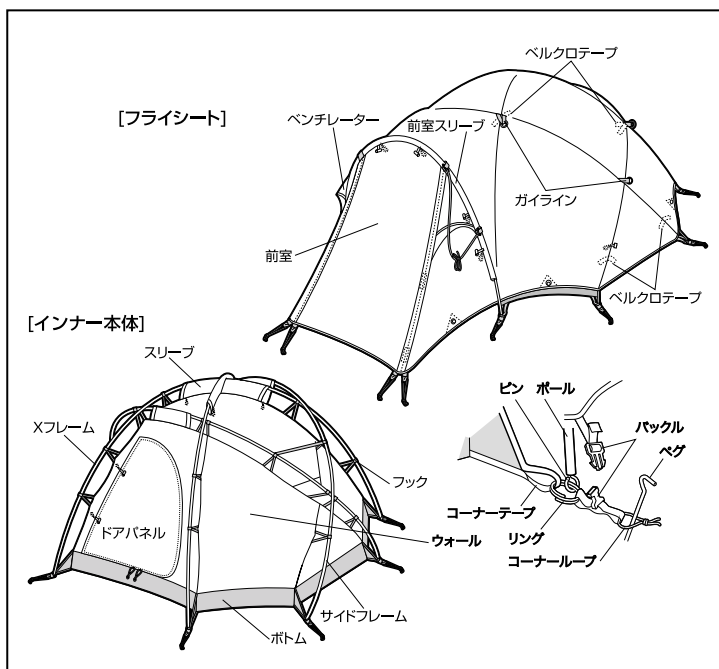
●テント火災対策

一昔前のアウトドアブームの時は、テント火災のニュースをいくつか聞いたものですが、最近はほとんど聞きません。それは、テント生地に防燃加工や難燃加工が施されているものが多くなったからでしょう。カブやボーイのキャンプでは、テント内で火気を使用することはないでしょうが、この難燃加工・防燃加工も購入の際のチェックポイントの1つです。

ちなみに、テント火災を防ぐには・・・

- テントとテントの間隔は6メートル以上あけること。
- 小さいテントの中ではストーブやランタンなど火気を使用しないこと。
- テントの中ではタバコを吸わないこと。
- テントの近くに緊急の消火用水として水を入れたバケツを用意すること。

●図2-1-7 ドームテントの各部名称(スノーピーク・ランドブリーズ)



●防水スプレーは撥水剤

通常防水液(防水スプレー)として売られているのは撥水剤です。撥水处理はテントの防水性を補強するもので、撥水性が弱くなるとテントの防水性にも影響します。フライシート表面の水が水滴になって落ちずに、生地上で広がり濡れるようだったら撥水剤を塗ります。



○万一火事になったら直ちにテントから脱出すること。防燃加工や難燃加工がされていないものは、あっという間に燃えてしまう。身の回りのもの持ち出そうなんて考えてはいけない。ということです。これも覚えておいてください。テント生地に防燃加工や難燃加工が施されているいないに関わらず、これは守っていきたいものです。

●メンテナンス性を考える

テントを長持ちさせるには、使った後のメンテナンスが大切です。この作業がたいへんなモデルだと、メンテすることが億劫になるので（私がその典型）、できるだけメンテナンスが楽なテントを選ぶってコトも大切です。

ポイントは、洗っても大丈夫なもの、リペアがしやすいもの、カビが生えにくいものです。そんなものを選びましょう。

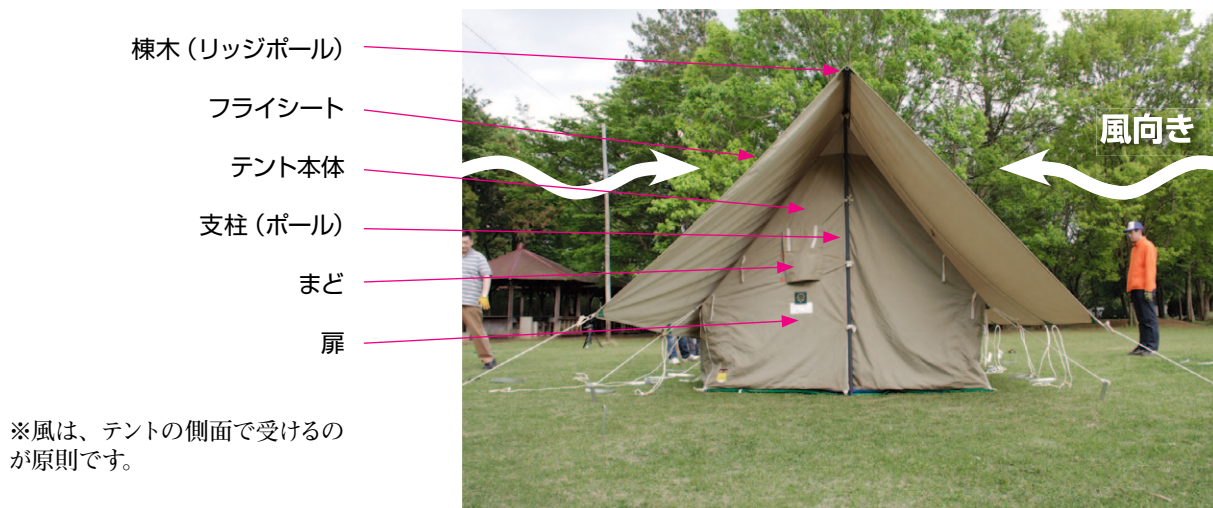
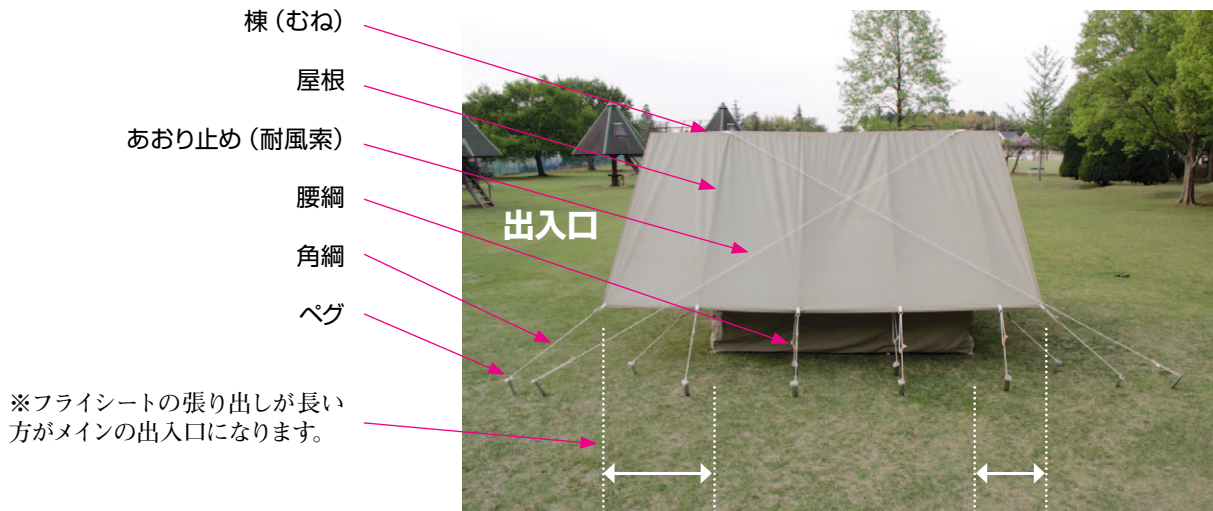
メンテナンスについては、P.000 を参照してください。

カビは絶対に生やしてはいけません。これはくれぐれも守るようにしてください。ジャンボリーから帰ってきてコンテナを空けたらカビだらけだった・・・はよく聞く話です。

よく「ナイロンだからカビは生えないもんねー!」と言っている輩がおります。確かにその通りで、ナイロン自体にカビは生えません。カビが生えるのは、ナイロンに付いた食物カスや油脂などで、そこに生えたカビの菌糸がナイロンの織り目に入り込んでいくのです。そうになったら、もう洗っても落とせません。高圧洗浄機でも試しましたが、ダメでした。しばらくしたらまたそこからカビが生えてきてしまいました。・・・ということがないように、絶対にカビを生やさないようにしましょう。もし貸し出してカビを生やされてしまったら、新品を買ってもらいましょう。その位の意識を持ってテントは管理してください。

1. 指導者テント（ジャンテン）を正しく建て、また、きちんと収納する。

【各部の名称】



【準備編】

①



②



①セットを確かめる

指導者用テント（通称ジャンボリーテント・ジャンテン）は、3つの袋に収納されている。1つ目は、テント本体とフライシート、グランドシート。2つ目は、テントポールとリッジポール。3つ目は、ペグとピンだ。

特に注意が必要なのは、テントの型や収容人数、また、製造した時期によって、ポールの長さが微妙に違うこと。そのため、正しいセットを選ぶ（→購入時に識別名称を記入しておこう）。

②それぞれの中身を確認する

テント本体、フライシート、グランドシートはあるか、どの順序で入っていたか、ポールは数は揃っているか、ペグ（ライン・綱を固定するもの）、ピン（テント本体を固定するもの）の数は揃っているか、また、折れたり曲がったりしていないかをチェックする。

できれば、綱の状態、スライダーの状態も確かめたい。

【設置編】

③



④



③地理的条件、気象条件を考慮してテントを建てる位置を決める

設営地に着いたら、まずは地面の傾斜がほとんどないけれど、ゆるやかな凸地になっているところを選ぶ。これは寝ている間に斜面の下に寄っていかないように、また、雨水がテントの床下に溜まることのないようにするためだ。

位置を決めたら、小石や小枝を取り除き、整地する。

キャンプ中の風向きを予め調べておく。指導者用テントでは、風は棟に対して垂直に当てて受け流すのが基本だ。入口が風下にならないように位置を決め、グランドシートを置く。

バスタブのように各辺のウォールが立ち上がっているグランドシートは、写真のように、ウォールを内側に折って、床面だけが地面に接するように置く。

④ピン4本とテント本体を取り出す

グランドシートの4隅の外側に、ピンを1本ずつ置いて（刺して）おく。

次に、グランドシートの上で、テント本体を広げる。

⑤



⑤テント本体をグランドシートの上で広げる

テントを広げるときは、えいやっと広げないで、写真のように、順序よくほどこうにきちんと広げていく。これは、雨で地面が濡れている時に、テント本体のはみ出た部分を泥で汚さないようにすること→すなわち、テントを大切に扱うこと（おきての実践、スカウト精神を養うこと）に繋がる。

最終形は、テントの4隅が、グランドシートの四隅の上に来るように広げる。そのことを意識して広げよう（⑦に関連）。

⑥



⑥ジッパー（ファスナー）を全て閉じる

出入口（扉）、扉とウォールをつなぐジッパーは、全て最後まできちんと閉じておく。

テントは、角綱・腰綱でテント本体を引っ張ってピンと張ることで立つ。そのためテントを張る前にジッパーを最後まで閉じておかないと、テントが張り上がった時に、ジッパーが途中で閉まらなくなってしまう、困ったことになる（特に雨や風の時に）。

⑦



⑦テント本体とグラウンドシートの4隅を合わせて置く

テントの4隅とグラウンドシートの4隅が一致するように、テント本体をグラウンドシートの上に重ねて置く。これは、テントの底の形を長方形にするためと、テント本体の裏（居室）側を汚さないためである。

※分かりやすくするために出入口部を上になっています

⑧



⑧テント本体の4隅についているループリボンにピンを通し、地面に固定する。

扉やウォールの下縁（ボトム）には、ループリボンが付いている。まずは、その4隅のループリボンにピンを通して、テントの4隅を固定する。これは重要なポイントだ。（ここではまだ4隅だけでいい。他のループリボンをピンで固定するのは⑩で行う。）

この時、グラウンドシートにピンを刺さないように注意する。テントのボトムはグラウンドシートよりもこころもち外側にする。

ピンは、⑧下写真のように、ウォールのボトムと地面の間に隙間ができないようにするために、ピンの頭までしっかりと地面に刺す。



⑨



⑨テント本体の吊り輪（リッジループ）を表に出す

写真⑨のように、次の工程に向けてテント本体の棟にある吊り輪がいちばん上になるように出しておく。

※次の⑩と⑪の工程は、「撤収編」⑫⑬のようなフライシートのたたみ方がされているならば、スキップしてOK。

⑩



⑩フライシートをテント本体の上で広げる

写真⑩のように、フライシートも、きちんと解くように広げていく。

フライシートの棟の端から、「あおり止め（耐風索）」の取り付け位置までの長さが、左右それぞれ異なっている。その長い方をテントの入口側に持つて行く。

広げたら、結んであるあおり止めをほどいておく。

⑪



⑪フライシートを折っていく

写真⑪のように、フライシートの重なっている上側の幕（屋根）を適当な幅で、棟（リッジ）と並行に折っていく。

次に、重なっている下側も同じように折っていく。

そして、折った下側を、テント本体の下に滑り込ませ、テント本体の棟（リッジ）の輪とフライシートの棟（リッジ）が接するように、テント本体をフライシートで挟み込む。

（撤収編⑫⑬の図を参照）



⑫リッジポールをテント本体の棟の吊り輪に通す

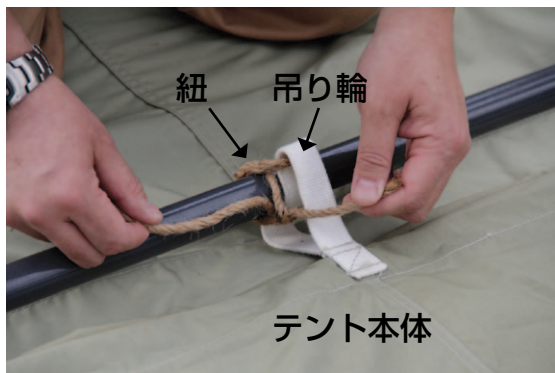
通常は、写真⑫のように、テント本体の棟に付いている吊り輪に、リッジポールを通す。

※雨の時にフライシートを張ったままテント本体の撤収ができる方法を県連では採用している。その手順は次の通り。

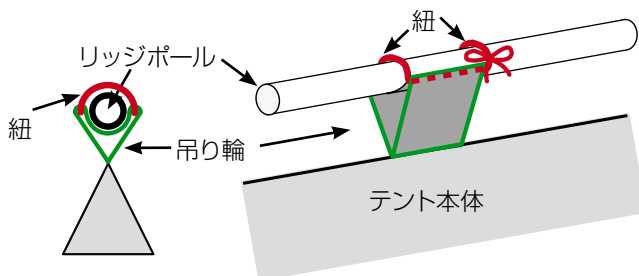
※テント本体を吊り下げている吊り輪の工夫

ここがこの雨対策仕様の部分。とても簡単な工夫だ。

○用意するのは 50cm の細引き又は太めの麻紐：4本



テントを建てる際に、普通は、吊り輪をリッジポールに通すが、この方法はポールに通さずに、吊り輪をリッジポールの下から横直径のところまであてがい、下図のようにポールの上からまわした紐で結んで固定する（右写真と下図）。こうすることで、テントを立ち上げた後でも、結びを解くとすぐに本体が離れ、フライシートを張ったままテント本体を取り外してたたむことができる。



⑬フライシートのごロメットにリッジポールの端のフックを差し込む

リッジポールの上側の両端には、外側に向かってフックが付いている。それを折ったフライシートの棟の両端についているごロメット（ハトメ）にそれぞれ差し込む。



⑭とりあえず、一段落

ここまでで、とりあえずテントを建てる基本的な準備はできた。ここで、各綱（腰綱、角綱、あおり止め）を解いて伸ばしておこう。

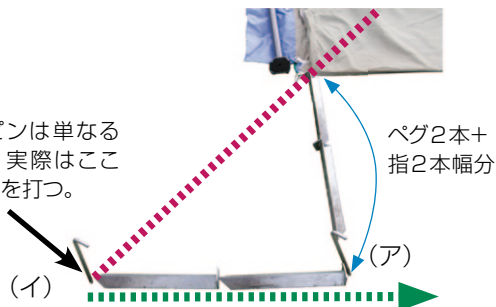
実は、このフライシートの状態は、撤収のときにたたんでおくのがポイントなのだ。すると、取り出した時に、すぐこの形となる。（撤収編⑫⑬）



⑮支柱にテント本体を結ぶ（いちばん上だけ）

次は、テントの入口のジッパーの脇に付いている一番上の紐を支柱に結びつける。これは、支柱が高いので、あとで結ぶのがたいへんだから。（テント本体を折り曲げているため、全部の紐は結べない）

①⑥ このピンは単なる目印。実際はここにペグを打つ。



①⑥①⑦ 予め綱を張るためのペグを打っておく

写真①⑥のように、ペグを打つ位置は、横にした支柱に対して、グランドシートの入口の辺の端から、その延長方向にだいたい横にペグ2本分（ア）、そして、グランドシートの長辺の延長方向にだいたいペグ2本+指2本幅分（イ）くらいを目安とする。

正確には、（イ）ペグの位置は、写真①⑦のように、グランドシートの対角線の延長上（赤の破線）の位置になるように打つ。

また、ペグを打ち込む時は、打ち込み角度を保つために下図のように、足をペグの根本においてペグを押さえ、ハンマーでペグを打つこともある。ここで注意することは、ペグに対して直角の状態ではハンマーが当たるようにすることだ。ちなみに打ち込み角度は地面から 60 ～ 90 度が良い（よく言われる 45 度にするのではない）。



また、打ち込む深さは、地面の状態にもよるが、ピンのように頭まで打ち込まなくてもいい。硬めの地面であれば、10cm ほど残しても問題ない。要は、強い風が吹いてもテントを支えるだけの保持力が確保できればいいのだ。

（ちなみに、写真①⑥緑の破線は、腰綱のペグを打つラインで、矢印の延長線上に腰綱のペグが打ち込まれることになる：②②参照。また、写真①⑦の赤の実線は、グランドシートの位置である。）

①⑧いよいよテントを立ち上げる

テントのボトム（底）の4隅が固定されているので、支柱を立てるだけでテントは自立する。（これは指導者用テントの場合であって、A型テントは自立しないことはないが、構造上無理な力をかけられないので、自立させない方がいいでしょう。）

①⑨支柱を地面に垂直に立て、ピンで本体をとめる

支柱の接地面は、グランドシートの短辺（入口側）の中央の外側の地面に置く。

続いて、扉のジッパーの脇に付いている紐を支柱に結ぶ。

また、ソドクロスはグランドシートの下側（地面との間）に差し込んでおく。そして、テント本体のボトム（下部）の周囲にあるループリボンにピンを刺して、地面に固定する。

このとき、支柱が直立していることを確かめること。

②①テント本体の綱（角綱と腰綱）を張る

①⑥①⑦で予め打っておいたペグに角綱を掛ける。このときに注意するのはテント本体のウォールが弛まないようにすること（左図矢印）。ペグを打つ特に残しておいた頭部約 10cm の範囲でベストポジションを見つける。（写真②①の黒矢印がウォール。写真②②が弛んでいない状態。）

続いて、テント本体やフライシートの屋根がそれぞれ平面になるように、また、屋根の傾斜の延長上に（写真②①の破線）、かつウォールが弛まないように腰綱用のペグを打ち、腰綱を掛ける。地面が平面であれば、写真②②の緑の破線のように角綱同士を結んだラインの上にペグがくるはず。地面に起伏（凸凹）があれば、ペグを打つ位置を調整する。

②②フライシートの綱（角綱と腰綱）を張る

フライシートのペグの打ち方、綱の張り方は、テント本体と基本時に同じだ。



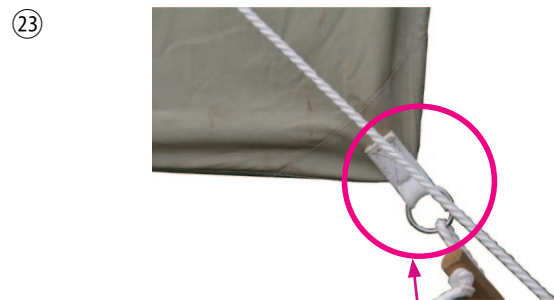
②②

フライシートを張るとき注意点は、テント本体の屋根とフライシート間に空間を(青両矢印のように)とること。その間隔は、ひさしの端あたりでだいたい 30 ～ 40cm 位だろうか。

②②ペグを打つ位置

写真②②の破線のように、基本的には両サイドの角綱を結んだラインの上にペグがくるはず。ところが実際には、地面の起伏(凸凹)やテントやフライの経年変化などにより、テントやフライの屋根が平面になっていなかったり、ウォールが弛んでしまうことがある。そんな場合は、ペグを打つ位置を前後させたり、ペグを打つときに残しておいた頭部約 10cm の範囲で調整する。

ペグを打つ位置は、「テントやフライの屋根を平面にする」「ウォールを弛ませない」ための位置という本来の意味を見失ってはいけない。



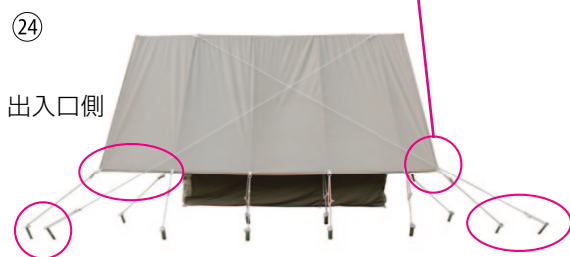
②③

②③あおり止め(ストームライン：耐風索)を張る

あおり止めは、強風でフライシートが煽られて飛ばされないように押さえるロープのことだ。このロープは、テントに接しないようにコブシ 1 つ位空けて張る(接して張ると、風が吹く度に擦れて布地が痛んでしまうから)。

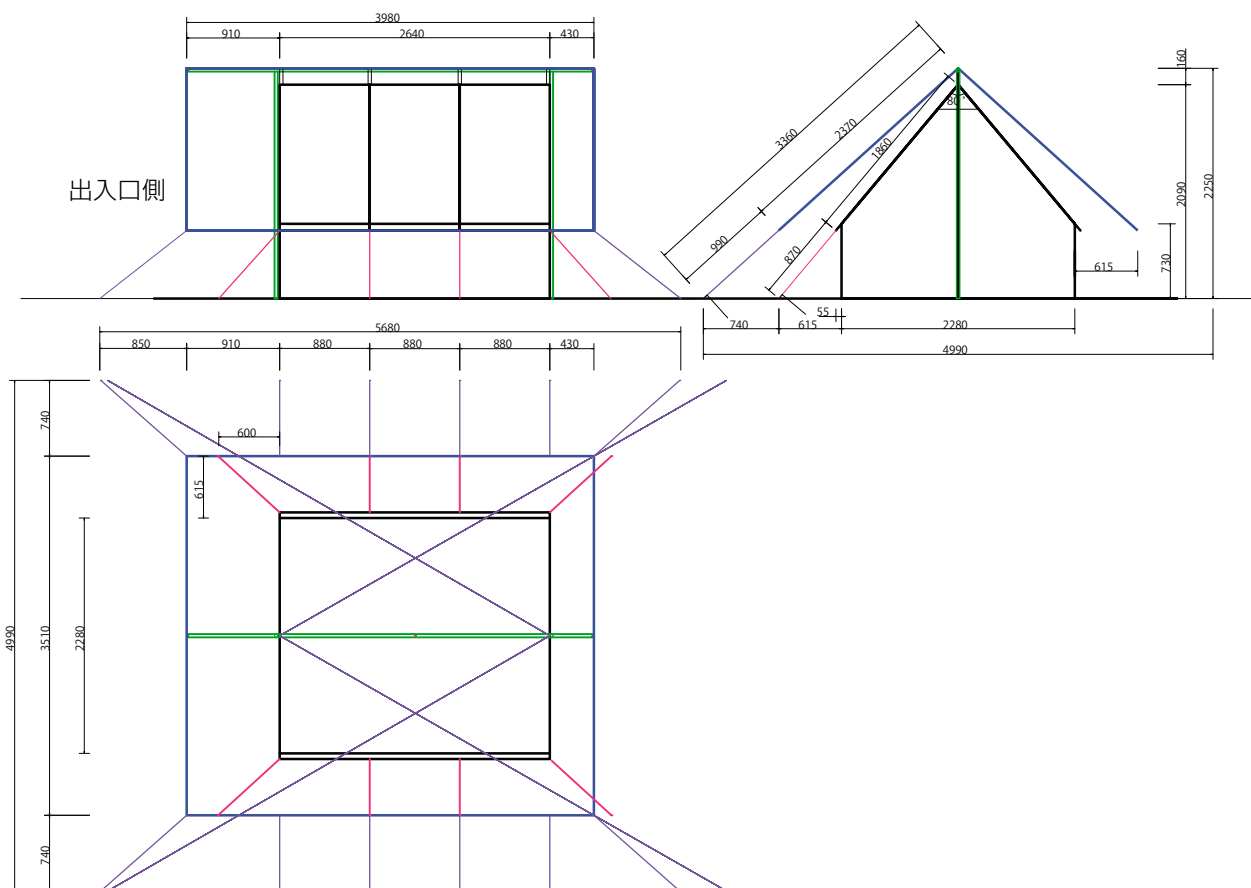
また、あおり止めのペグは風で抜けないようにしっかりと打ち込むこと。煽られて暴れ回るペグはまさに凶器と化す。

指導者用テントは、出入口と反対側は写真②③のようにフライシートの角にあおり止めがくるように張るが、出入口側は、フライの角ではなく、1 つ目の腰綱の付け根あたりにくるように張る。これは、出入口側の角綱より先にペグを打たないで、動線を確保するよう、あおり止めの索の長さが短く設計されているからだ。



出入口側

●指導者用テント (設計図面・3面図)



【撤収編】



●撤収は設営の逆の順序で！

ここで紹介する撤収方法は、雨でもテント本体を出来る限り濡らさないように工夫して設営した「雨天対策仕様」の撤収方法だ。そのため、通常の方法とはちょっと異なっている。

茨城県連盟では、この方法を標準とし、各種の講習会・研究会ではこの方法を用いて指導することとした。

① グランドシートとテント本体、腰綱、角綱を外す

まず、テント本体とグラウンドシートを外す。次に腰綱→角綱の順にペグから外す。この時はまだペグはそのまま刺しておく。また、テント本体を留めていたピンは全て抜いて、ペグ収納袋の上に置いておく。

②腰綱、角綱を1本ずつまとめる

腰綱と角綱は、スライダーを綱端の輪まで下げて、輪になった
 □ーブは、それぞれ軽く引き解け結びでまとめてをしておく。

③テント本体を吊り下げている吊り輪の紐を外す

ここが県連で標準としているこの雨対策仕様の部分。結びを解くとすぐに本体がリッジポールから離れる。

④ 本体をたたむ

本体をたたむときの注意ポイントは・・・

- 布の表と表、裏と裏を合わせる
- 汚れたところは汚れたところ同士を合わせる
- 紐は布の中に折り込む
- 四角になるようにたたむ

だ。

左の写真④はちょっと解りづらいが、下から順に

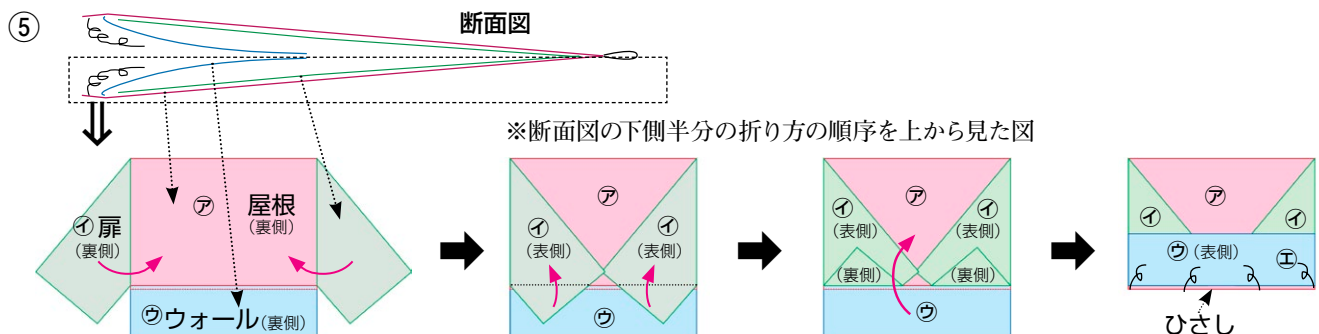
㊦屋根+ひさし → ㊩とびら → ㊵ウォール+ソドクロス
 → ㊥紐(腰綱・角綱) → ㊵ウォール+ソドクロス
 → ㊩とびら → ㊦屋根+ひさし

となっている。

⑤の図で解説すると、

- 片側(下側)の屋根+ひさし㊦をグランドシートの上に広げる。
4 隅のジッパーは開けておく。
- 次に扉㊧を台形に伸ばして上側に折ってのせる。そしてウォールと屋根の縫合線に沿って㊧扉のウォール側を折る。
- ウォール + ソドクロス㊨を伸ばして折る。
- 綱㊩も外に出ないようにウォールの上に載せる。

上側も同じように折っていく。(慣れてくると左右の扉のジッパーを閉じたまま折っていくことができる。)





⑥⑦収納袋に入る大きさにたたむ

本体は、棟に並行にたたんでいく。せっかく収めた布や紐が外に出ないように丁寧にたたむ。写真⑥のように、まず細長くたたんでから、写真⑦のように小さく、収納袋にジャストフィットするようにたたんでいく。そして袋に入れる。

如何にここをきちんとたたむか・・・が、スカウトとしてのこだわりだ。点検時のポイントにもなる。

グラウンドシートは、たたまずそのままにしておく。次のフライシートをたたむ工程でもヨゴレ防止のために使用する。雨が降っているいないに関わらず、テントはできるだけ汚さない工夫をしよう意識を持つことが大切。

※このタイプのグラウンドシートの材質は、水がしみ込まないので最終的に濡れても拭けば水気は取り去れる。材質が織布のもののは防水性があっても土の付着や経年変化で防水性が落ちているので、雨天時にはとりあえずそのまものたたみ、直後の晴れた日に十分な乾燥させることが大切だ。

⑧⑨フライシートをたたむ

次はフライシートをたたむ。

まず、角綱を残して、腰綱とあおり止めをペグから外す。外しながら②同様にそれぞれまとめて結んで(*1)おく。ただし、あおり止めは⑩で結ぶ。この段階でそれを行うのは、立って作業が出来ることと作業の進捗が一目でわかるからだ。

左の写真ではグラウンドシートはたたまれているが、広げておきます。

*1
スライダーを綱の端の輪まで下ろして、綱を半分にした状態にする。
それを引き解け結びなどで緩く結んでおく。



⑩リッジポールを外します

角綱を外して、フライシートを倒す。その時のポイントは・・・

- フライの布地の表と表、裏と裏を合わせる
- 紐は布の中に折り込む
- 設営の時に使いやすいようにたたむ
- 雨の時は、地面に着けずにたたむ

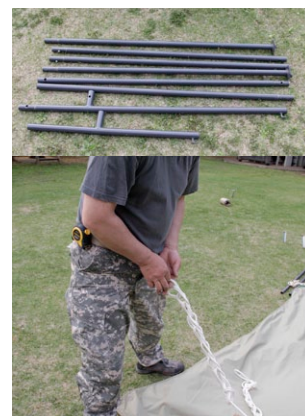
だ。

取り外したリッジポールは右下写真のようにまとめておく。

あおり止めは、「鎖編み」(*2)などで短くかつすぐに解けるようにしておく。

*2

あおり止めのスライダーを綱のつけ根ので上げて、綱を半分にし、つけ根の方から編んでいく。





⑪ フライシートを広げる

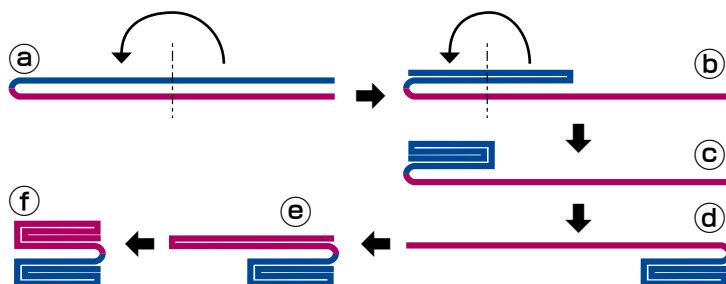
まず、フライシートを裏と裏を合わせて2つ折りにして、グランドシートの上に乗せる⑩（多少はみ出すが気にしない）。

⑫⑬ フライシートをたたんでいく

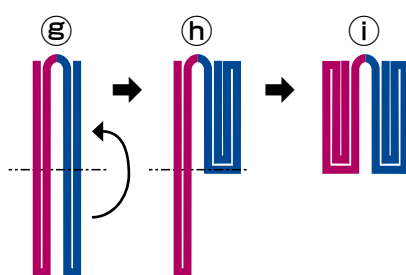
フライシートは、設営時にリッジポールを取り付けるためにわざわざ広げなくてもいいように、それを見越してたたむ。

① 地面が乾いているときは、グランドシートの上に広げて、まずは上側をたたむ。

棟側に並行にまず半分折る⑥。更にそれをまた半分に折って1/4にする⑦。次に、フライシートをひっくり返し下側を上にする⑧→⑨。そして⑥⑦のように1/2→1/4にする。



② 雨の時は、2人で持って地面につけずに立ったままで行う。



●まず、角綱だけを残して他の綱はそれぞれまとめておく。

●片側の角綱を持って屋根を外側に2つ折りにした状態でリッジポールから外す。続いて⑧の状態にしなが、もう片方の角綱を外す。

●続いて⑥のようにそれぞれの屋根を半分にし、外側に折り①の形にしていく。

この何れの方法も、要は、たたまれた状態で「棟（リッジ）」部分が外側に出ていること、それを1つ広げれば⑫のようにポールが置けることが大切なのだ。



設営編⑭の形

⑭ 収納袋のサイズまでたたむ

フライシートは、一方向からたたんでいくのではなく、両端から中心に向かって半分に折り、それから収納袋のサイズに合わせて折っていく。

⑮ 収納袋に入れる順序

テント本体、フライシート、グランドシートを収納袋に収めるが、その順序はテントを建てる時の順序となる。「撤営は、次のキャンプの準備である」と言われるように、使う時を想定して収納していくこと。

まず最初に使うのは「グランドシート」。次に「テント本体」最後が「フライシート」となるから、その逆の順序で収納する。



⑯ グランドシートをたたむ

グランドシートも他と同様に収納袋サイズにたたむ。

ここで気をつけなければならないのは、地面と接触する面、すなわち汚れている面は表に出さないということだ。

もちろん、たたむ前にヨゴレを落として乾燥させるのは当たり前だが、それでも接地面を内側にする。それは、収納したときに先に入れたテント本体を汚さないためだ。

また、収納袋のサイズに合わせて折りたたむのは、袋に入れたときの嵩を高くしないということと、丁寧に作業を行いテントを大切に痛めないという「スカウトは質素である（ものを大切にす）」のおきてとスカウト精神の実践の意味もある。



⑰ ポールをしまう

ポールは接地面や他の部分のヨゴレをよく拭き取って、左写真のように、横に袋を広げて順に入れていく。

よく、右の写真のように袋を縦に持って、ポールを上から入るのを見かけるが、ポール収納袋の底を破くことに繋がるので、横から丁寧にに入れていく。



⑱ ペグを抜く

ここまでの作業が終わってからペグを抜く。ペグを担当する者がいる場合は、これ以前に抜いてもかまわない。ポイントはペグの数を確実に数えながら責任持って抜くということなのだ。

もし抜けない場合は、左写真のように、ハンマーで前後左右から叩いて地面との間に隙間を作って抜けやすくしてから抜くか、ハンマーを返しにひっかけて抜くか、ロープと棒でテコを作って抜く等の工夫をしてみよう。



⑲ ペグの土（泥）をとる

地面に打ち込んだペグだから、当然「土」が付いている。そのままだと、土に含まれる酸によって錆が出てくる。ペグをキレイな状態のまま錆びさせないことも、スカウトとしてのこだわりのひとつだ。

まず、写真のように、小枝や他のペグなどで、ざっと土を取り除く。次に、野営工作物を解体した時に出る麻紐や草木の葉っぱなどで、更にキレイに土を取り除く。



⑳ ペグ・ピン洗う

次に、バケツに水を汲んで、そこでペグをきれいに洗う。

手順①で抜いたピンも、ペグ同様に洗う。

※流し台に持って行って、そこでペグやピンを洗っているのを見かけるが、できるだけ現場で行いたい。その理由は・・・



②①よく拭いてから乾かす

ベグを洗ったら、雑巾等で水気をよく拭いて、乾燥させる。拭くことで乾燥が早くなる。

乾燥には、特に決められた方法はない。効率よく&確実に乾燥できればOKだ。

ただ、地面や草の上に直接置くのは・・・×だ。できれば写真のようにダンボールや新聞紙などの上で乾燥させる。それは地面に置くとせっかく洗ったものを汚したり水分が付くから。また②②の防錆スプレーをかける時に自然環境に影響を与えない・・・などの理由が考えられる。



②②防錆スプレーを塗る。

ベグやピンの水気が完全になかったら、CRC556のような防錆スプレーをかけて、ウエスでまんべんなく広げて伸ばしておく。

②③ベグ収納袋に頭から入れる

ベグは、とがっていない「頭(上部)」の方から、手順①⑦のポールと同様に、袋を横にして丁寧にに入れていく。

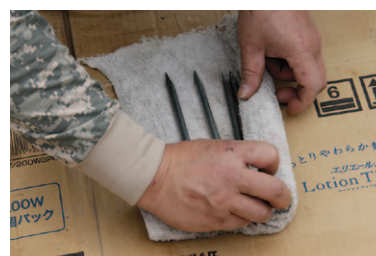
そう、袋の底を破らないためだ。



②④②⑤ピンはウエスにくるんでから収納する

ピンは、②②で防錆スプレーを拭いたウエス等にくるんで、やはり頭の方から袋に入れる。

入れる際には、受取時にチェックしたリストと同じ数のベグやピンがあるかを確認する。 もし足りないときは、とにかく探す。どうしても見つからない場合は、荷札やガムテープで「何がどれだけ足りないか」と「記入年月日」を書いてつけておくと同時に、指導者に報告する。



2. ドームテントを正しく建て、また、きちんと収納する。

設営の基本パターンを覚える

同じテントでも、スリーブタイプと吊り下げタイプとでは勝手が違う。でも、タイプ別に張るコツをつかんでしまえば、フレーム構成、ポール本数、完成した形が違って、どんなテントでも張ることができるようになる。

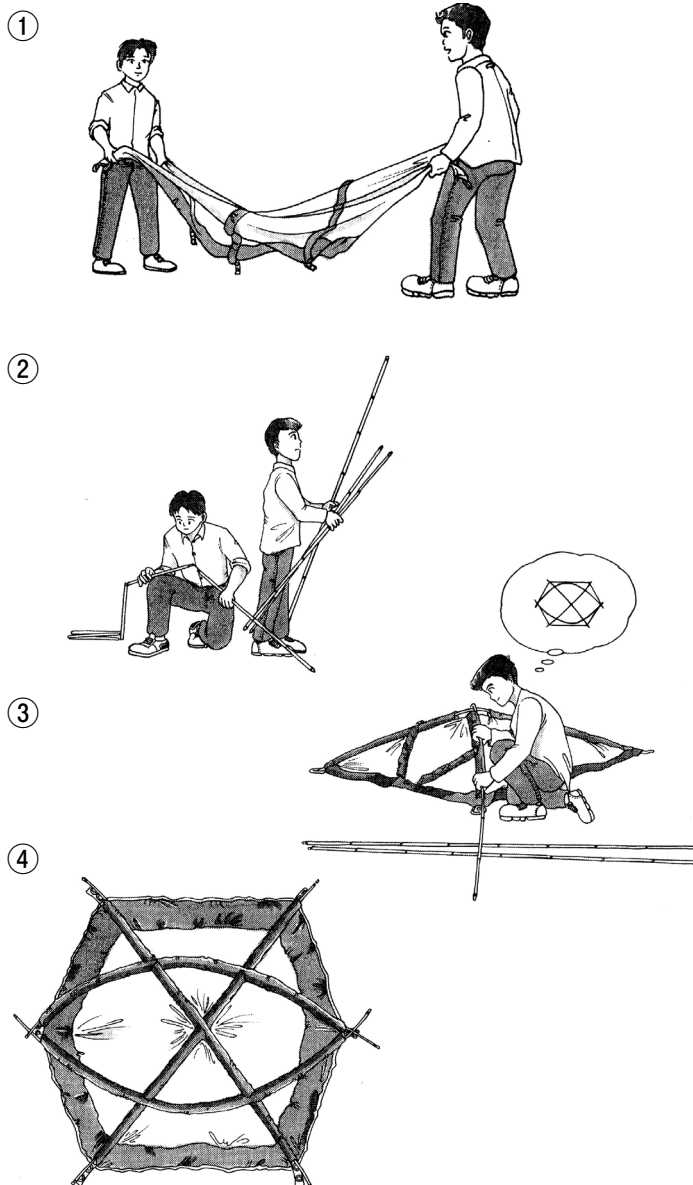
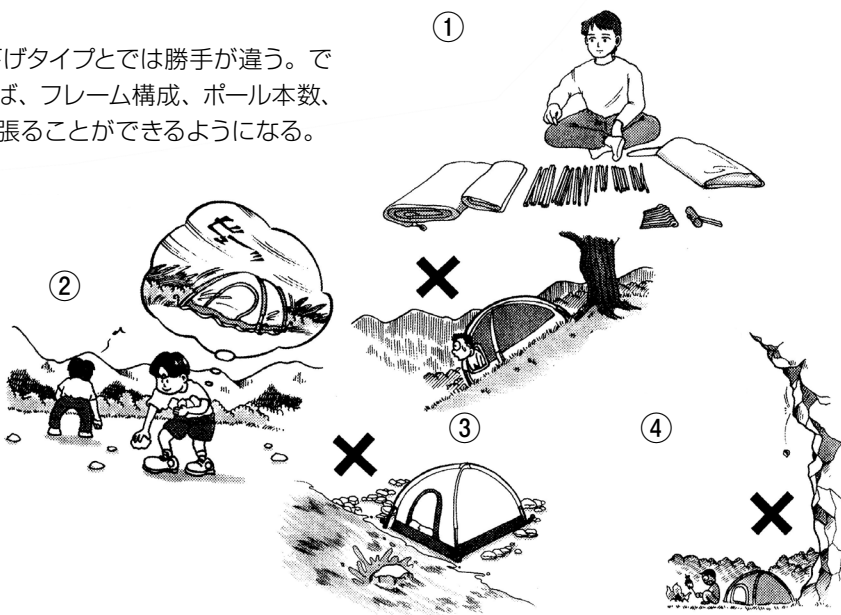
①キャンプ出発前には、必ずパーツの確認を忘れずに行う。数、状態など。

②風向きと傾斜のチェックと、設営場所の整地を。テントは風下に入口を向け、なるべく平坦地が凸地を選び、小石や枝等を取り除く。

③(上) 多少の傾斜地ならいいが、斜面があるということは上から何かが転がってくる危険があるということを忘れてはいけない。

(下) 河川敷や中州でのテント泊は絶対にダメ。キャンプ地は晴れていても、上流で集中豪雨が来れば、急な増水や鉄砲水の危険がある。

④崖の下もダメ。上に何かがあるということは、何か落ちてくる可能性があるということ。同様に、大きな木の下も、枝が落ちてくる可能性がある。まずは避けることが基本。



【スリーブタイプテント】

スリーブとは、ポールを通すための筒のこと。全テント本体に付いているスリーブにポールを通してテントを建てる、最もポピュラーなタイプのテントだ。

①スリーブが見えるように地面にテントを広げる

まずテント本体を、ボトム(床)を下にしてきれいに広げる。その時、テントの入口は空気が入るように多少開けておく。

出入口は風下になるように向けておく(風上だとテントが風を孕んでしまうので)。

②ポールをすべて組み(つなげ)、長さを比べる

ポールは全て同じ長さとは限っていない。そのため、全てのポールを組んで、長さの違いを確認しておく。

③完成したフレーム構成をイメージして、ポールをセット

左図のテントの場合、基本的には、対角線の×字形クロスポールから先にセットする。その後で残りのポールをセットする。

最近のテントは、スリーブの差し込み口が色分けされているものも多く、迷わずにポールをセットできる。

④ポールを全部通し終えたらできたも同然

左図のように、全てのポールをスリーブに通す。スリーブの途中に切れ目があるものは、ポールを全部通したところで、通し間違いがないかどうかを確認する。



⑤ ポールの片側の先端をグロメットに固定する

まずメインの対角線クロスポールから固定する。1 辺の両端のポールの片側の先端をグロメットに固定する。固定の方法はメーカーによっていろいろなので、それに従う。

⑥ ポールをグイッとたわませ、テントを立ち上げる

片手でスリーブをたくすようにしながら、ポールをスリーブに突っ張らせて押し込む。スリーブを持っていた手をグロメット部に持ち替え、それを引っ張りながら、ポールをセットする。他のポールも同様にセットする。

⑦ 最終的な位置決めをして、テントを移動する

テントを立ち上げてから位置を変える時は、入口をかざしもに向ける。また、引きずるようなことはせず、ちゃんとテントを持ち上げて移動しよう。

⑧ ベグを打って（ペグダウン）、テントをしっかり固定する

ベグはグロメットではなく、グロメットが付いたテープの先の輪に刺して打ち込む。決してグロメットに打ち込まないように。また、ボトムと各辺の張りがピンとなっているかを確認しながら、上図の順番にベグを打っていく。

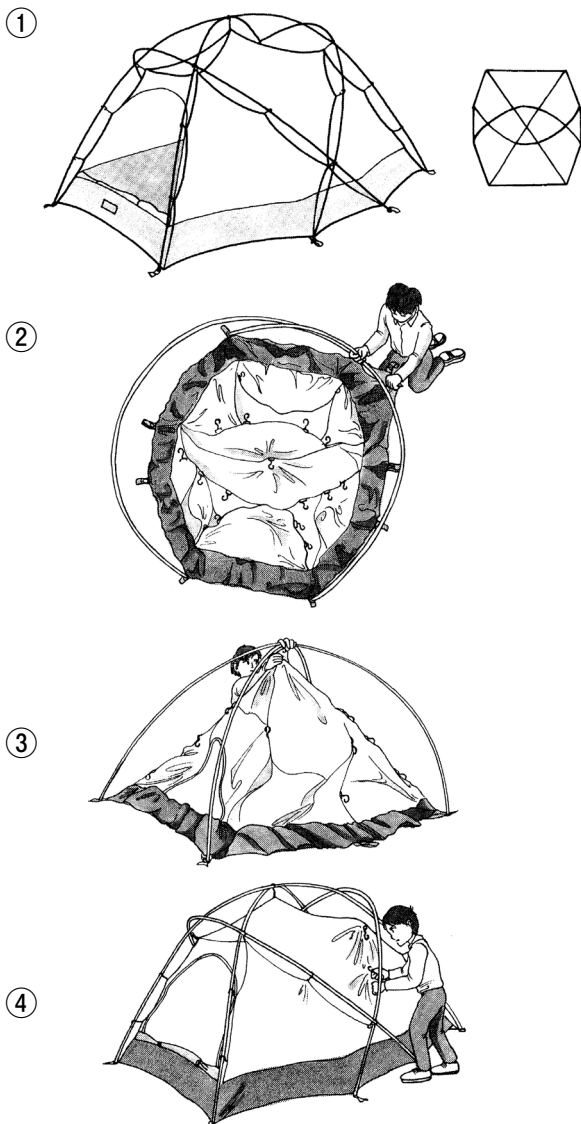
四角形でも八角形でも基本は、まず1辺をピンと張ってその両端をベグで固定し、次に反対の辺を同様に固定する。その次は横の辺と移っていく。

⑨ フライシートをかぶせる

フライシートの入口を確認（多くのメーカーでは入口にその会社等のロゴマークを付けている）して、セットしていく。小型テントならともかく、テント高がある大型の場合は、風下から風上に向かって風をはらませるようにフライシートをかぶせるとスムーズにいく。

⑩ フライシートもしっかり固定する

フライシートは、裾についているバックルやフックで、ポールを刺したテープのO環やD環などに取り付けていく。テント本体とフライとの間に隙間がなかったり、弛んで張りがないと通気性が悪くなるので、張り綱などで張って固定する。万一の天候急変に備えて、しっかり固定する。備えよつねにだ。



【吊り下げタイプテント】

フレームを組み立て、そこにフックをかけるだけでテントが建てられる。テント本体が点で引っ張られているので、フライシートとテント本体との隙間が大きく、スリーブで通気が遮られないので、通気性はとても良い。

①フレーム構成を考える

まず、フレーム構成を考え、メインとなるポールからセットする。

②クロスポールの両端をグロメットに留める

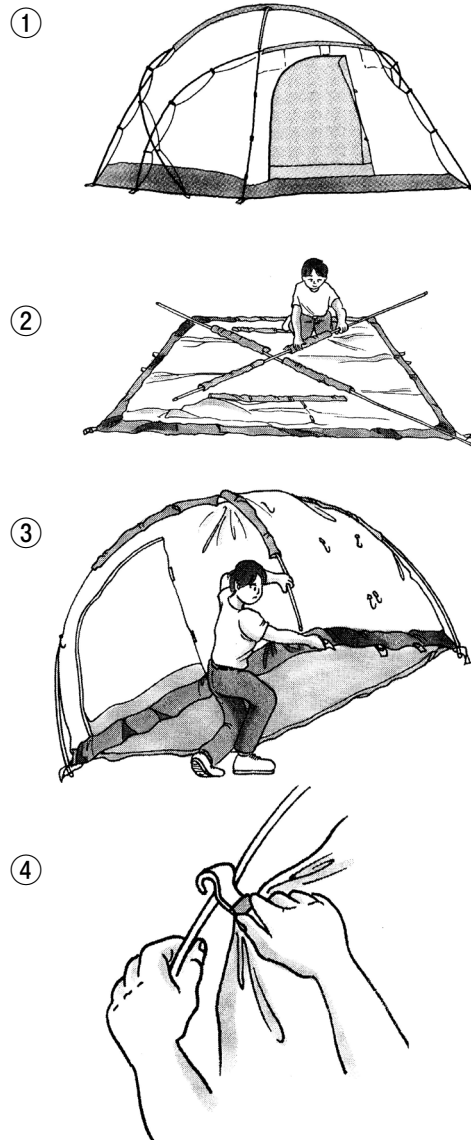
正面入口側のグロメットに2本のポールをそれぞれ差し込む。反対側に回りポールをたわませ対角位置のグロメットに固定する。

③ポールのカロス部分からフックをかける。

2本のポールをゆっくりと立ち上げ、天頂部でクロスした部分をフックで留めると自立する。あとは残りのフックを順番に掛けていく。

④残りのポールをセットしテントを固定して完成。

残った2本のポールを同じ要領でたわませてセットする。フック掛けが完了したら、入口を風下に向けて、ペグダウンし、フライシートをかける。



【スリーブ&フック併用タイプ】

大型テントだと天頂部が人の背よりも高くなる。すると、全部フックだと背が届かずフック掛けがたいへん。全部スリーブだとポール通しが面倒だしテントが重くなる。そこで登場したのがルーフ部をスリーブにしてサイド部をフックにしたこのタイプだ。

①スリーブ&フック併用タイプは、手軽に設営できることから、カブのキャンプに向いている。

②テントを広げてスリーブにポールをセットする

ポールの長さを確認後、ポールをスリーブに通す。それから入口側のグロメットに2本のポールをそれぞれ差し込む。

③思い切りポールをたわませ一気に立ち上げる。

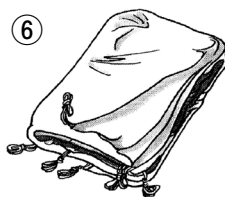
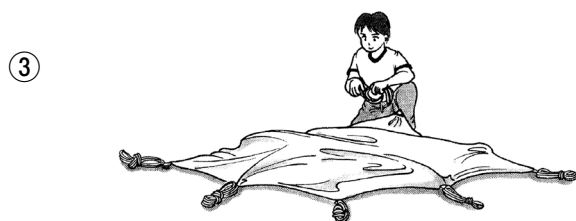
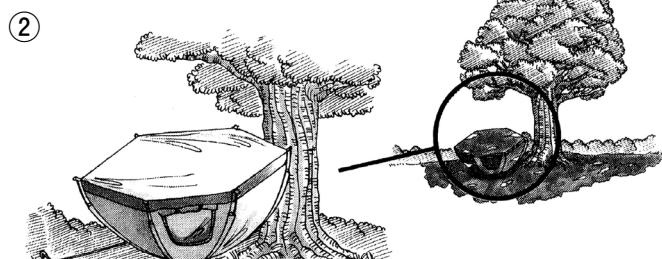
反対側に回り込み、ポールをグイッと押し出してたわませてグロメットに固定する。もう1本も同じように固定する。

④あとはフックを掛けて、アツという間にできあがり。

残りのフックを掛けてインナーテント完成。フライは出入口2ヶ所を接続し、後面に向けて風をはらませると楽に被せられる。

撤営はテントを乾かすところから

朝はぎりぎりまで寝ていたい。日常の生活では、起きてすぐに出かけられるが、キャンプの場合はテントを十分に乾かしてから撤収するので、十分な時間を見ておこう。



①テントはよく乾かしてたたむのが原則

ボトム（床）は地面からの湿気で、フライはテントの内外気温による結露でけっこう濡れている。雨が降っていない限り風通しのいいところで陰干しをする。（フライは裏返して、濡れている面を上にする。）

②ボトムの乾燥はテントをひっくり返す

ボトムの乾燥は、フライを外して、テントを逆さまにして行うと効率的。このとき風に飛ばされないように張り綱を引くのをお忘れなく。ただし、ポールに無理な力がかかると折れることがあるので注意する。また、濡れている地面の上では行わない。

③張り綱は絡まないように束ねておく

フライシートについている張り綱は、1本1本束ねておくか鎖結びでまとめておく。また、濡れている時は、フライから外して、別に乾かしてから収納する。

④フライのルーフ部は縫い目に沿って折る

まず、フライをふたつ折りにする。このとき縫い目で折らず、縫い目を少しずらし、縫い目に沿って折ると形が揃いやすい。それから、更に半分にする。

⑤四角になるように折っていく

次に、全体的に四角形になるように、いびつな形状に折り重なった部分を、折り込みながらたたんでいく。

⑥バックルや金具をずらす

フライの裾にあるバックルや金具、そして張り綱などが、1ヶ所に集中すると、丸めたときにゴツゴツするので、平均にならす。

⑦収納袋のサイズに合わせて折りたたむ

テントの収納袋のサイズより一回り小さくなるように折りたたむ。

次にテントをたたんで、いっしょに収納袋に入れるので、とりあえず袋の側に置いておく。

⑧インナーテント内のゴミを取り除く

小型テントなら、ペグを抜いてテントを縦にして持ち上げ、中のゴミをふるい落とすこともできる。

大型のテントでこれをやると、ポールに角の負担がかかり折れてしまうこともあるのでしてはならない。ハンディタイプのほうきで、テント内のゴミを掃き集める。

⑧



⑨



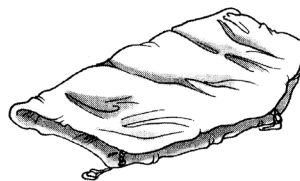
⑩



⑪



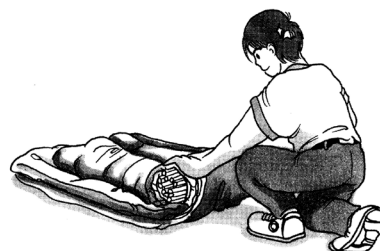
⑫



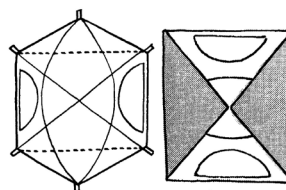
⑬



⑭



⑮



⑨ポールは押し出して抜くのが基本

ポールはショックコードで連結されており、引っ張るとジョイント部から外れてしまって抜きにくくなる。従って、スリーブタイプのテントの場合は、ポールを押し抜く。言われれば当たり前ののだが、意外と引っ張ってしまう人は多い。

⑩ポールは真ん中から外していく

ポールを端の方から抜いてたたんでいくのはダメ。まず半分に折り、また半分に折り・・・という具合に折りたたむ。こうすることで、中のショックコードが均等に伸び、コードの劣化が防げる。

⑪インナーテントは生地が偏らないように

ボトムをきれいに広げて、ウォール部の生地がなるべく平らになるように広げておく。こうするとたたんだときに形がいびつにならない。

⑫グロメットテープが重ならないように

きちんとたたむことを優先して、グロメットテープをぴったりと重ねる人が居るが×。⑥で述べた通り。

さて、まず、空気の抜けが言いように、扉や窓のジッパー

を少し開け、折ったときにドア側が残るように二つ折りにし、また同じ方向に、空気を抜きながら形を整え、折っていく。最終的に⑦同様に、今度は収納袋のサイズより二回り小さくなるように折りたたむ。

⑬ゴミを払いながらたたんでいく

インナーテントは、地面に置いてたたんでいくのが普通なので、地面のゴミが付いてくるので、それを払いながらたたんでいく。このとき最初に片側から一気に丸めて中の空気をしっかり抜き、巻いたのを半分まで戻し、同時にもう一つの端を巻いていく。

⑭フライシートに全てを巻き込んで収納する

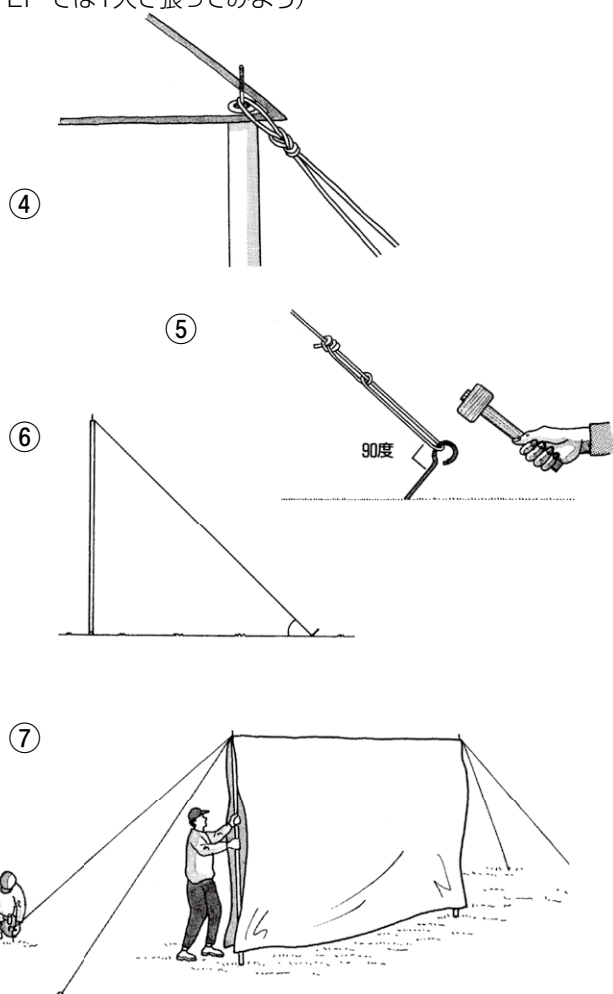
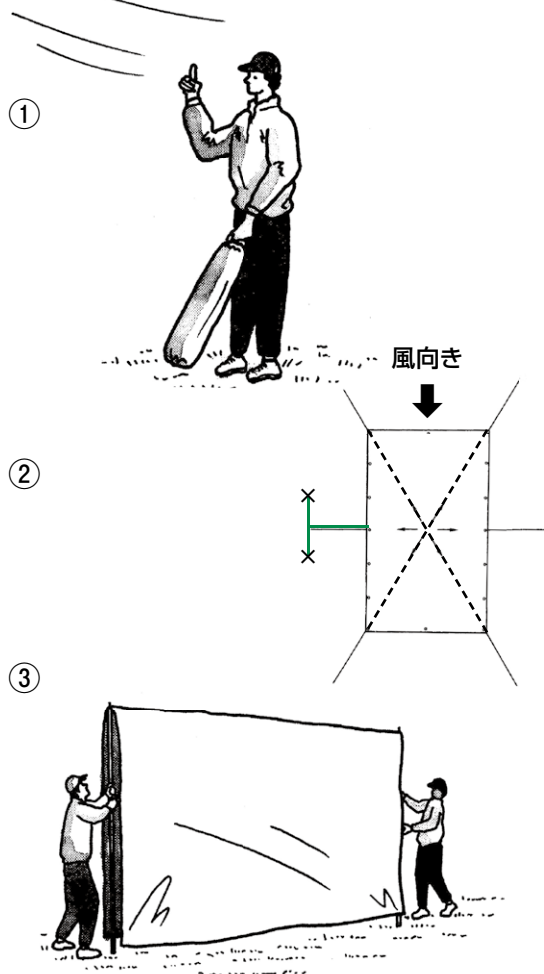
先にたたんだフライに、インナーを載せ、更にポールと、袋に入れたベグを芯にして、きっちりと巻いていく。そして、収納袋に入れて完了。

⑮毎回折り目を変えるのが長持ちに秘訣

毎回同じ折り目でたたむと、折り目の生地や防水処理が劣化していく。そのため、2～3パターンのたたみ方を決めておいて、毎回折り目を変えていくと、テントはより長持ちする。

タープを張る (野営法講習会では2人で張ったが、STEP では1人で張ってみよう)

ポイントは対角線とロープワーク



ここでは、スカウトキャンプのシーンで多く使われる6本のポールを使って張るレクタングラータイプについて説明する。

①地面と風向きをチェックする

なるべく傾斜の少ない場所を選ぶのがコツ。次に風の有無と風向きをチェックする。風が強いときは風上に対して棟線が垂直になるように方向を定めるのが一般的。

②タープ布を広げてポールと張り綱を各所に配置

方向が決まったら、まずタープ布を広げて、各ポール、張り綱、そして固定に必要なペグを所定の場所に配置する。このとき四隅のコーナポールをそれぞれタープ布の対角線上に置くのがポイント。

③センターポールを支えて位置と方向を確認

次に、タープ布を取り付けたセンターポールを2人で立ち上げ、センター位置の最終確認をする。風が強いときはタープ布の端を握って作業をするとい。確認が済んだら、センターポールの片側の張り綱のペグを②図の×位置にそれぞれ仮打ちしておく。(緑線のようにポールを使ってほしい位置を出しておく)

④ポールに張り綱をセットする

張り綱はタープ布のグロメットをポールに刺した上からセットする。これでフライを押さえ込む。

⑤ペグと張り綱の角度

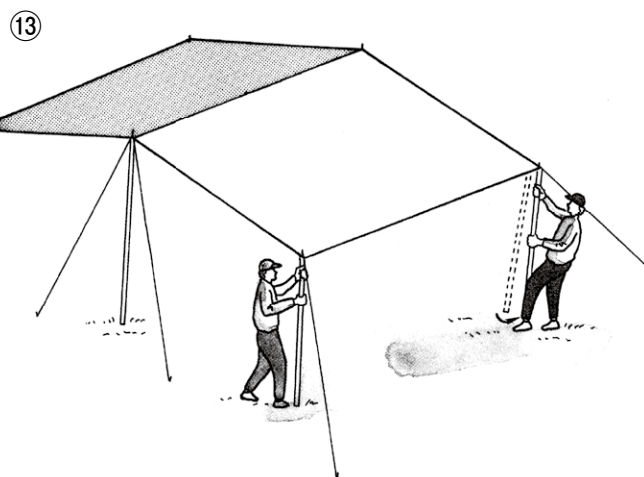
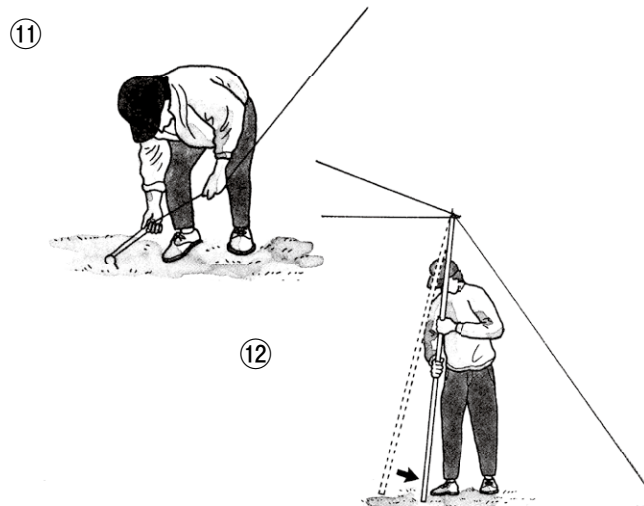
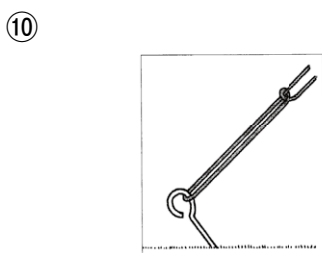
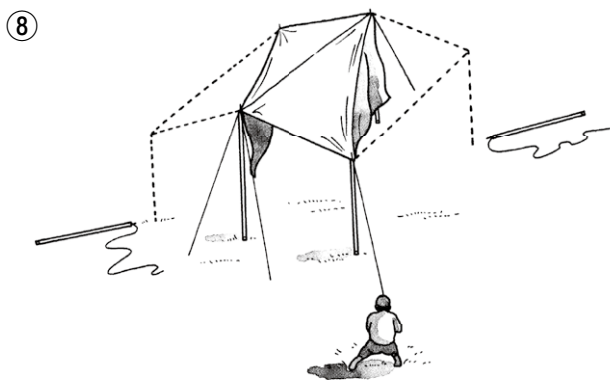
張り綱に対してペグが90度になるように打ち込むのが基本。90～120度(地面とペグの角度は45～60度)の範囲であればOK。

⑥張り綱は角度に注意

地面に対して立ち上がり角が45度、また、ポールを中心にして左右45度に張り綱を張るのが基本。2本取りの場合は60～90度以内になるようにする。

⑦センターポールを固定

1人が1本のセンターポールを支えた状態で③の仮ペグに張り綱を掛ける。反対側は、地面の状況に合わせて張り綱とペグ、地面に角度などに注意しながら、いちばん力強く支えられる位置を見つけ、仮にペグダウンしてポールを固定する。このとき、ポールの先端をやや外向きにセットする。



⑧対角線上に位置するコーナールールをセットする

センターポールをセットしたら、まず対角線上に位置する2本のコーナールールを固定する。張り綱は②のように対角線上に張る。2本取りの場合はポールを中心に左右30～45度以内になるようにする。⑧⑨では、張り綱はまだ仮張り。

⑨残りのポールをセットする

もう1組のコーナールールを⑧のようにセットすれば、ポールの立ち上げが完了する。

⑩位置が確定するまではペグは半打ち状態で OK

張り綱同様この段階ではペグも半打ちの仮打ち状態にしておく。⑪から最終調整に入る。

⑪張り綱をしっかりと引いてタープ布のシワをチェック

ここで初めて張り綱に強いテンションを与える。タープ布にシワが無いようにバランスを考えてテンションを掛けていく。同時に張り綱がポールに対して、あるいは地面に対して正しい角度にセットされているかを確認。問題がなければ各ペグをしっかりと打ち込む。

⑫ポールを正しい位置にセットし、タープ布に張りを与える

外向きにセットしていたポールを垂直近くに立ち上げるようにセットする。これによって張り綱では掛けきれないテンションをタープ布に与えることができる。

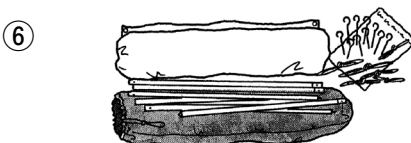
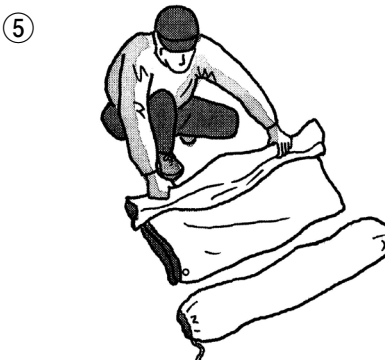
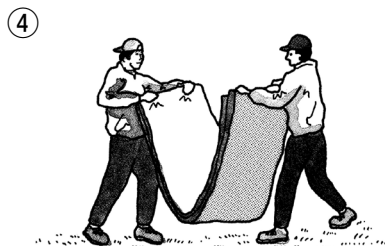
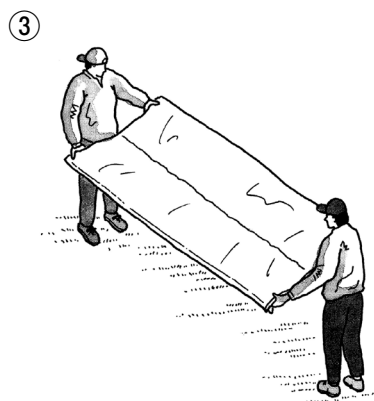
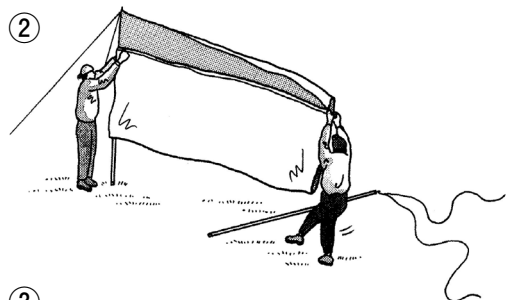
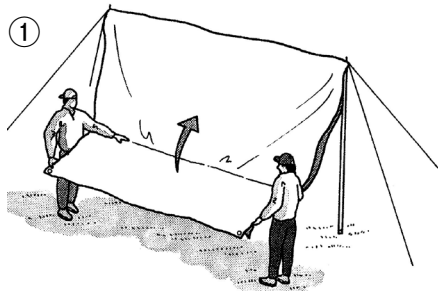
⑬タープ布のシワ、よじれを調整して完了

最後にタープから離れて全体を見渡し、張り具合をチェックする。もしタープ布にシワやねじれがあったら、張り綱の引き方向を変えるなどして再調整する。

※風への対応

(風が一定方向から吹いていると仮定して) 風が強いときには、風上側のタープ布のポールを外し、予備のロープなどを直接コーナーのグロメットに結び (P.29 参照) 地面近くまでタープを下ろし、低い位置で斜めに固定する。これによって風を受け流す。間違っても風下側を下ろさないこと。タープ布に風が孕んで、煽られて全壊の憂き目に遭う可能性が高くなる。

タープの撤収



タープもテント同様、次に使うことを考えてたたんでいく。

① 2人でやればタープを汚さない

両サイドのポールを外し、二つ折りの状態でタープ布の両端を合わせて持つ。

折りがきれいになるように、内側になるタープ布を腕でならしてから折りたたむ。

② 布地の端や折り目の端はきれいに合わせて持つ

センターポールの先端に向けてタープ布の端を持ち上げながら、タープからポールを外す。タープ布が地面に触れないようにセンターの折り目と両端を持って作業する。

③ 二人で声を掛け合って作業する

四隅がずれないようにしっかりとタープ布を持ち、収納袋のサイズに合う幅になるまで、「せーのお」と声を掛け合って同時に折りたたむ作業を続ける。

④ タープをバタバタと降ってゴミを落としていく

タープ布に付いたゴミを振り落としながら、更に小さくたたんでいく。このときも地面から浮かせて作業する。

⑤ 収納袋の大きさに合わせてたたむ

一人で持てる程に小さくになったら、収納袋を目の前に置いて、袋に入るようにそのサイズに合わせておりたたんでいく。

⑥ ポール、ペグ、張り綱をそれぞれのケースに収納

ポール、ペグの汚れを落とし、張り綱を1本ずつ束ねて数を確認する。そしてそれをそれぞれに収納袋に収納する。大きな収納袋に全部を入れるときは、ポール、ペグ袋、張り綱をタープ布でくるんで、収納袋に入れる。